



片<sup>か</sup>角<sup>たつの</sup>

加名山炯斗

柔らかな午前の光をステンドグラス越しに浴びて、少女は聖霊への祈りを捧げていた。

十四年間欠かさずに続けてきた朝の礼拝。

今日もこの国が青く美しく存在するのは、全て聖霊のお導きだ。あと二年もしたら私も結婚するだろう。残念ながら私に婚約者はいないけれど、きつとお父様は素敵な人と引き合わせて下さる。望みを言って許されるなら、出来れば優しい人がいい。お父様とお母様のように、いつも微笑んでいられるような夫婦になりたい。

「エイラ、朝の礼拝は終わったかしら？朝御飯にしましょう」

「はあい」

今日はいつもより特に熱心に祈っていたらしい。もうそんな時間かと立ち上がる刹那――

「――？」

立ち眩みだろうか。ふらつと平衡感覚を失ったかと思うと、左眼を激痛が襲った。

「――ッ！?!?！ぐ、あ……ッッ、ア」

左眼。奥の方から中を無茶苦茶に穿つような痛み。

痛みと、衝撃。

ガンッ!!と一度きり。脳を揺さ振る激しい衝撃の後、痛みか熱か判別のつかない感覚がジュウ

ジュウと頭部左側を焦がし続けた。

「どうした… !! エイラ!!」

異変に駆け付けた両親はエイラを見るなり絶句し、駆け寄ってはくれなかった。

痛い、痛い。熱いよう。

エイラは助けを求める声すら出せず、ただただ必死に左眼を抑えて酸素を求め続けている。

人が倒れる音。母親が失神し、父親がそれを支えるのが視界端に映った。

何が起きているのか疑問に思う余地すらなく。痛みに耐え続けていたエイラの意識も、そこで絶えた。

イエソドは他国に比べ独自の発展を遂げている。高度な建築技術、精密な電子機器、道路や水道などの整備、法律の浸透。それらの技術を欲して、国外からの協力・研修要請は多い。しかし、イエソドは独善的で排他的な国である。技術提供に応じる利点がない、と頑として拒み続けている。唯一医術に秀でるケセドとのみ交易がある。

そこへ、なんとか捻じ込んだ。伝手を辿ってケセドの医療関係者を紹介して貰い、それなりの時間を掛けて親しくなった。そして漸く、イエソドへの行商に同行させて貰える事になったのだ。

「は～～」

入国手続きと検査を終えて高い塀門を潜ると、中は一面の青だった。馴染んだ形の家は無く、やたらと背の高い、四角いばかりの建物が立ち並ぶ。道は平らに舗装され、ちらほらと馴染みのない機械が走っている。

街の中心には、入国前から見えていた、高く国を覆う壁よりも更に高い超高層建築物が天を貫いて聳え立っている。

（ぼっきり折れたりしないんだろうか）

天にも届く建築物といえどコクマにも巨大な塔があるが、あちらはもっと山のように裾が広く

安定して見える。

暫く観光してから行商に合流すると、何やら慌ただしい様子だった。

「どうしたんだい？」

「往診を頼まれた。偶にあるんだ」

医療先進国の医療団体が来ているのだ。この機会に診て欲しいという患者はたくさんいる。それを逐一相手にしてはられない。つまり、相手にするのは金持ちだけだ。そもそも彼らは薬や機材の行商をメインに來ているのだが、医師も同行しているし、まああるこういった事態に備えて最低限度具は揃えてきている。

「しかし今回はレアケースだぞ」

先ずは、事前に「内々に」と連絡が来ていた。

「国外の者である事を見込んで」と。よくある事のように思えたが、何やらニュアンスの違いを感じていた。

ついで金額が異常だ。診察料にしては桁違いの額が前金として支払われた。

しかし、それらに対する疑念は患者を見て氷解した。

「なんだったんです？」

「……………先生さん、あんた確か塔の人間だったな」

丁度いい、と同行を促され、

「いや、我々にも専門というものがありまして。医療関係で僕がお役に立つとはとても…」

「ああ、大丈夫だ。そっちに期待はしてねえよ」

慌てて辞退しようとしたものの、結局連れていかれてしまった。

連れていかれた先は立派な豪邸だった。四角いばかりの建物とは違い、屋根があり庭がある、解りやすいお屋敷だ。奥にはやたら細く尖った屋根が見える。あれは個人用の礼拝堂で、裕福な家には大なり小なりあるものらしい。

家の主人に挨拶をして中へ入る。

「先生さん、患者はこれ中だ」

「先生…ではこの方も医者様で？」

「あー、いや違う。この人は、魔術師だ」

紹介を受けた主人も、紹介された本人も、その説明にぎよっとする。入国前から、中ではそうは名乗るなとしつこく言われていた。

「いいんですか、そんなこと言って」

「お互いに口は固い筈さ」

ね、とウィンクされた主人はあたふたと肯いた。

「外の方に頼るとは、そういう事です」

部屋の中は薄暗く、部屋の片隅には頭からすっぽりと布団を被って蹲る人影が一つ。

「エイラ、またお医者様達が来てくれたよ。こっちへ来なさい」

布団の塊は億劫そうに、または不審げに、よたよたと立ち上がってこちらへやってきた。

「娘のエイラです」

エイラと紹介された布団の塊は、恐らく、小さく会釈をした。

「…宜しくお願いします」

幼さの残る可憐な声。

「エイラちゃん、ごめんね。ちょっと患部をみせてくれるかな」

「…はい」

布団を払い、出てきた姿に言葉を失くす。

「先生さんはこんな症状、知ってるかい」

「…いや、聞いた事もないですね」

その言葉にエイラは瞳を伏せる。

「って事だからこの子連れて帰りたいのさ」

聞いたこともない奇病とあっては、ちゃんとした施設で然るべき対応をしたいワケだが、難し

いのはそこなのだ、と医師は言う。

「ケセドはイエソドに対し『医療』の面で交易を許されているんですね？ 患者の連れ出しは禁止されているんですか？」

「いや。過去にも数例ある。イエソドでは治せない病だと申請して、許可が降りれば連れ出せる。ついでにこれ自体はそう厳しい審査があるわけでもない」  
では何が問題なのか。

「殺されてしまいます」

此方から問う前に答えたのは、蒼白な顔の父親だった。

「ころ…!?」

「この国には『人間』しか住んでない。異形に対しあまりにも過敏なんだ」

「申請には必ず『面会』があります。こんな姿を見られたら、必ず『悪魔だ』とされて処断されてしまいます」

そんな馬鹿な。と笑い飛ばすには、この場の雰囲気はあまりに重かった。大枚叩いて『外』の人間に助けを求めたのは、国内の人間に知られれば処断されると—少なくともこの家族は—信じているからだ。カーテンを閉め切った暗い部屋も、広い屋敷なのに使用人が見当たらないのも、そういう理由なのだろう。

（—ああ、だから。『口が固い』、か）



沈痛な面持ちで俯くエイラの頭部に視線を落とす。その左側頭部からは、大きく捻れた角が生えていた。

左眼の周りの皮膚は赤黒く変色し、硬化して、こめかみの辺りから角になっている。捻れた大きな巻角に。左の眼球も異色と化して、確かに化け物と呼ばれても仕方がない有様だ。右半身の可憐さが更に異容を際立たせている。これまで全く普通の姿だったのに、ある日突然、短時間の内に変化したのだという。

「それで：どうするんです？」

「病の原因を探るにも角の――暫定的に角と呼ぶが、これの切除を試みるにも、取り敢えずマルジュへ連れて行きたい」

それには『面会』を凌がなくてはならない。

「書類は適当にでっち上げられるが、問題はこの誤魔化しきれない外見だ。言い換えれば、外見が誤魔化せればどうにか出来る。なあ先生さん」

「なるほど。それなら僕の専門ですね」

エイラとその父親が理解の及ばない顔をしている傍で、二人の異邦人は「どんな外見に見せたか」の打ち合わせを始める。

勿論角は無し。眼球の色もただけでない。現実との乖離はなるべく少ない方がいい。白濁くらいにしておこう。皮膚も引き攣っている程度にしておく。

ああだこうだと言いつく度に、エイラの患部が変化していく。

かくして、「左眼周辺から側頭部にかけての皮膚疾患」という、言葉上嘘のない姿が出来上がった。

「こんな感じでしょうか」

「いいと思うけどなあ、大したもんだ。ご主人、どうでしょう」

「これは…!? 角は、な、治ったのですか…!」

興奮する父親に、エイラはきよんとしている。

「落ち着いて下さい。残念ながら治ってはいけません。これは、幻覚ですから」

「幻、覚？」

はい、と頷いて指を鳴らす。するとああ、残念ながら醜く角を生やした娘の姿に戻ってしまつた。

「光をちよつと弄って見え方を誤魔化すの得意なんです。受取手に施術するわけじゃないので不特定多数への誤魔化しにも有効です」

ふふんと胸を張っているが、この不審な魔術師の言を理解できる者は此処にはいない。

「それは、ずっとそう見えるようにしておく事は出来ませんか」

「うーん。そうすると僕がくたくたになってしまうので」

申請が通って面会の日が決まったらまた来ますと告げて、医師と魔術師は屋敷を後にした。

『見え方を変化させる』。物自体を変化させる事なく、受容体側に変化を与えるでもなく、実物とは違うものを見せる。悪事に利用しようと思ったらこれほど便利なことはない。

たいしたものだと褒めはしたが、その力はかなり恐ろしいもののように感じた。まあ当然の本人は、それを娯楽に費やす事しか考えていないようなのだが。

あの金の髪に白い肌、青い瞳を持つ典型的なティフェレト美人の魔術師は、世界最大の学問機関に講師として籍を置く魔術師である。

そこは通称『塔』と呼ばれていて、所在地であるコクマ国を中心に世界中から優秀な学者・研究者が集まっている。当人たちが曰く、魔術とは、世界の仕組み・万物の変化の法則を導き出し、人為的にそれを引き起こす事——というが、残念ながら万人に理解し得るものではない。

ようするにまあ、イカレたほど頭のイイ奴らの集まりだ。そう認識している。

神頼みでなく、自身で技術を研鑽していく。そう言ってみれば、ケセドの医療とも近しいのかもしれない。実際塔で薬学と錬金を修めた者がケセドで薬剤師をしている事もある。

何はともあれ、今回幻術の得意な魔術師を同行させていて良かった。前代未聞の症例だ。今の

処生命に別状はなさそうだが、他にどんな症状があるのかも調べてみないと解らない。  
差し当たり、面会を乗り切れるか。それに掛ってはいいるのだが。



結局滞在期間は一週間ほどで、結論から言うと、問題なく出国出来た。

此処でバレたら諸共に処断されるぞと脅された魔術師が念入りに施した幻術は欠片も疑われる事なく、『難病の哀れな少女、手術の為国外へ』と世間を賑わせつつ正面から堂々と出立した。ターミナルから転送を終えグナードに着いた一行は解散し、医師団は主国マルジュへ伝令を走らせた。エイラはマルジュからの迎えを待つて輸送されるらしい。

一息吐いて幻術を解くと、魔術師はくたつとその場にしゃがみこんだ。

「つくかくれ〜たく〜！ 思ったより長かった！ は〜、保ってよかった」

「すみません、ありがとうございました」

よく解らないけれど疲れさせてしまったようだと感じ、エイラは申し訳なさから頭を下げた。

「あ、ううん！ 気にしなくていいとも。人を助けられたんだからね！」

人好きのする明るい笑顔に、エイラも少しだけつられ笑いを浮かべる。

「あの、この頭：見られてしまっても大丈夫でしょうか」

親があれだけ警戒していたのだ。見つかったら殺されるとまで言われていた。それを白昼から大っぴらにして、落ち着くわけがない。

「大丈夫だよ。見られても、変わった飾りを着けてる変な人だなあって思われる程度さ。何せ

角が生えた人間なんて聞いたこともないからね」

「そんなもの、ですか？」

寧ろ聞いたこともないから迫害されるのではないだろうかとエイラは思う。

「角だけならね。でも、目の周りの異変は見られちゃうとちょーっと煩いかもね」

無意識に、エイラの手は自らの左眼へと伸びた。今は眼帯を着けている。なるほど。幅広のこの眼帯は、目の周りを隠すためのものだったのだと気が付いた。

「この国は医療の国だから、興味持たれて付き纏われちゃうかも知れないよ」

いたずらに笑うこの魔術師は、必要以上に怖がらせないよう気を使ってくれているのだろう。エイラはそう察した。

魔術は悪魔に繋がる術だ。聖霊の奇跡を否定する。

詳しくは知らないが、エイラはそう聞いたことがある。悪いもの、胡散臭いもの、邪教のもの。だが御使いのような姿のこの魔術師は、どうにも悪い人には思えなかった。それに、エイラの恩人だ。

（——そんな風に考えるなんて、悪い子かしら）

自嘲気味に浮かんだ笑みに、彼はにっこりと再度笑みを返した。

「じゃあエイラくん、迎えが到着するまで君の事を頼まれてる。いい宿を用意して貰ったみたいだから、行ってみようか」

「はい。宜しく願います」

「イエソドは春だったけど、こっちは今初冬なんだ。っていつでもこの国に冬はないようなものだから寒くはないと思うけど。大丈夫？」

「はい」

国を出たら季節が変わるなんて不思議だ。辺りの景色もまるで異世界。塀の内と外では、きっと世界が違うのだろう。

舗装されていない砂だらけの街。道には車もバイクも走っていない。見たこともない植物たちはなんだかトゲトゲしたものが多い。お医者様たちがそうだったように、行き交う人々は皆肌の色が褐くて、髪も藁のような色をしている。太陽はギラギラしていて、空の色も雲の形もイエソドとは違う。建物は頼りない土レンガや植物製だし、背の低いものばかり。何より、礼拝堂や聖堂が見当たらない。国を覆う壁が見えないのは、この国がとっても広いからなのだろうか。そんな風に考えながら宿に向かう間、人々がエイラの事を特別気にする様子はなかった。宿に着いて手続きを待つ間、角の重みで少しふらついた時に、近くにいた老人に「その頭は重そうだものねえ」と笑われたくらいだった。

エイラにはとても信じられなかった。

「この角、恐くないですか……？」

そうエイラに訊ねられた老人は「これはしまった」と一度額に手を当てて仕切り直した。

「おお恐い！ 恐いとも。なんて禍々しい角なんだ！」

「……」

どう反応を返していいか解らないエイラが複雑な顔をしていると、手続きを終えて宿の案内係と魔術師がやってきた。エイラはこれ幸いと老人に一礼してその場に背を向ける。

「あのくらいの年頃は扱いが難しいねえ」

後に聞こえた老人の呟きに、エイラは少し頬が赤くなるのを感じた。

「迎えが来るまで、多分三〜四日くらいだと思うけど、此处が君の部屋だ」

案内されたのはこざっぱりとした開放的な部屋だった。白っぽいクリーム色の漆喰。窓にはガラスも柵も填まっておらず、壁に穿たれた四角い穴でしかない。階層は2階。窓の向こうに見えるのは砂地と変な形の木。一人用にしては少し広い部屋。ベッドも少し大きめだ。大きな枕とふかふかの布団。

「僕は隣に部屋を取ってるから、何かあったら呼んでくれたまえ。あとこのホテルは医者が駐在してるから、その点も安心して」



外見の変化以外特に異変を感じないが、――強いて言うなら頭の重さと首肩の凝りは酷いが――、お医者様たちは病氣と判断して連れ出してくれたのだから、そういう配慮も当然なのだろう。そう考えたエイラは魔術師に頷きを返して、改めて部屋を見渡した。もっと軟禁に近い扱いをされると思っていたので、落ち着かない気持ちでいっぱいになった。

コンコン。

夕方の薄暗い部屋に、ノックの音が響く。

「エイラくん、入っていいかい」

どうぞと招き入れる声はどこか元気がない。

「夕飯だけ……」

言いながらドアを開けると、ベッドに顔を埋めているエイラが見えた。

「どうかした!? 具合悪くなった?」

慌てて駆け寄る魔術師に、エイラの方もまた慌てた。

「ごめんなさい、大丈夫です。ただちょっと、その、眩しくて……」

見ると、エイラは眼帯を外していた。長いこと封じていた所為だろうか、光が眼に滲みらしい。

「視力にも影響があるのかも知れないね」

「国に居た時も、少し眩しいような気はしていたのですが……でも」  
眩しそうに目を細めて、エイラは魔術師を見据えた。

「お医者様たちも貴方も、とても『眩しい』から」

外の人たちは、輝いて見えた。目が痛い程に。

「？ そりゃあ僕は美しいけど」

臆面もなく口にされる言葉に、エイラの方が真っ赤になる。

「ええと、そうですけど、そうではなくて……！」

「うーん、よく解らないけど、後でお医者さんに伝えてみよう。それで——」  
ぐるっと部屋を見渡して

「眼に障るから灯りはつけてないんだね」

「あ……。その、電気のつけ方が解らなくて」

夜。ベッドサイドのランプに教わった手順で火を点して、エイラは盛大に枕へ顔を沈めた。  
怒涛の異文化コミュニケーションはエイラの精神力をガリガリと削り取っていた。

電気がない。話に拠ると無いわけではないらしいが、とにかく普及していない。電話もテレビ

も無ければメールも出来ない。電話に似た通信機はあるにはあるらしいが、普及していないのなら無いも同義だ。トイレも、辛うじて水洗ではあるものの限り無く落ち着かない。外食ではサービスの飲料はお酒だった。冷たいお水は有料なんて、信じられない。未成年なのでお酒は飲めませんと断ると、とても不思議そうな顔をされた。角を見た時より変な顔をされたのが全く納得いかない。

そんなこんなで疲れ果ててベッドに突っ伏していると、みるみる眠気がやってきた。

ああ、でもお陰で――

この身の不幸を嘆く隙はなかった。心が落ち着いてしまったら、きっと身体の事に意識が集中してしまふ。不安になるような事を考えてしまふ。だから、良かった。

灯りを消すのも間に合わず。エイラが外国で過ごす初めての夜は、そうして静かに幕を降ろした。

昼は暖かいのに日が沈むと急激に冷えるとか、加湿して寝ないと朝喉が痛いとか、部屋に普通に虫が入ってくるので灯を点けたまま寝たらいけないとか加湿器に虫除けのアロマを垂らすとか。

あつという間に日は過ぎて、首都の病院からお迎えが来た。

お世話になった魔術師とお別れして、大きな爬虫類が牽く車のようなものに乗り込むと、エイラと同じように眼帯をした少年が座っていた。

「やあ。はじめまして」

「は、はじめまして…」

藁のような色の髪に薄い青紫の綺麗な瞳。快活な小麦色の肌。見たところ右側に眼帯をしている以外には特に怪我也なく、体調が悪そうな様子もない。一緒に輸送される仲間だろうか。

少年は目を眇めてエイラを無遠慮に観察している。とても居心地が悪い。

「すごいねそれ。立派な角。ちよつと触っていい？」

「いやです」

少年は眇めていた目を見開いた。自分でも驚くほどきっぱりと拒絶してしまい、エイラは動揺して目を逸らす。

「そうだね、ごめんね」

あっさりと謝る少年の声に視線を戻すと、彼は笑顔で席を叩いた。

「ほら、早く座りなよ」

「あ、はい…」

エイラが着席するのを見計らって、少年はエイラの顔を覗き込んだ。

「なんで丁寧語なの？」

「え？」

丁寧語を喋るのに「なんで」も何もあるだろうか。

「あ、そっか。きみ名前なんだっけ」

「え、ええと…エイラです」

「あー、つばい。いいね。僕はセルビア。よろしくね」

「…よろしく…」

ノリについていけない。乗車から数十秒、まだ走り出してもいない車内で、既にエイラは疲れを感じ始めていた。

「セルビアさんどこか悪いんですか？」

「えっ」

「えっ」

無遠慮に角を見られたこともあって勇気を出して訊いてみたのだが、やはり立ち入った事だった。慌てて誤魔化そうと思考を巡らせかけたが――

「なんでまだ丁寧語なの？もう知らない人じゃないのに」

「????」

先程の唐突な展開はそういう意図があったのか。自己紹介を終えたら即打ち解けられると思っているのだろうか。エイラは恐怖にも似た理解できなさを感じた。

「癖といいますか……地なので、諦めて下さい」

「そうなの？ならいいけど。あ、そうだ。僕はね、」

その時、唐突に扉が開いた。

「セルビアくん。君はこっちだよお」

「うおっ吃驚した。見つかったか」

白衣の下に目に痛い派手な色のシャツを着た大柄な男性が、セルビアの首根っこを掴まえて車外へと引き摺り出した。

「じゃあまたねエイラ。休憩時間にまた会おう！無事首都迄お連れしますよー」

「うん、早いとこ準備してね？出発が遅れると色々予定が狂っちゃうから」

「ええと……」

セルビアを引き摺り出した男性は、そのままエイラの隣に腰を下ろした。

「はいこんにちは。はじめまして。僕はフェディット。これから君の主治医だ。よろしくね」

「宜しく願います」

深々と頭を下げる。外見に似合わない柔らかな口調に面食らったが、自分を担当してくれるお医者様とあれば恐いよりは全然いい。

「エイラくんだったね。あつてるかな？」

「はい先生」

「うんうん。はゝ。ちょっと失礼。あゝ、本当に生えてるんだなあ。へー」

走り出した車内で、先生はひとしきり角の状態を確認し終わると眼帯に目を止めた。

「うん？ 目の方は——」

「変色しているの、人目隠しにと眼帯を着けていたのですが……その、取ると眩しくて」

「——ああそうだっけ。塔の先生から報告を受けてるよ。じゃあ後で診せて貰おう」  
そういつて身を離すと、先生は車内を漁り始めた。

「ええと、この辺に用意しといた——…あつたあつた。よし」

取り出したのは紙束とペン。

「じゃあ移動中に問診の方済ませちゃうね」

今の体調、角の事、眼の事、皮膚の事。発症した時の事。家族の事、生活習慣、好きな食べ物嫌いな食べ物、趣味、その他諸々。関係あるのか疑問に思うような事もたくさん訊かれた。

先生は聞き上手でまとめ上手だったけれど、初対面の人と長時間二人きりで話し続けたのだから、流石に疲れてしまった。

そろそろ一度休憩しようと停まった先は、街ではなくて、自然公園のような場所だった。水の滲む大きな岩とそれを囲む緑。その外側は最早見慣れ始めたさらさらの砂地。適度な間隔で幾つか存在するそれらの岩に、ちらほらと人が集まって湧き出る水を掬っている。

エイラたちが乗ってきたのと似たような車も何台か停まっている。恐らくパーキングエリア、のような扱いの場所、なのだろう。

「エイラ！」

セルビアが駆け寄って来る。そういえば、休憩時間にまた会おうなどと言っていた。

正直、この無礼な少年に割く心の余裕はないのだが。あまりにも嬉しそうに寄ってくるので、無碍にするのは躊躇われた。

「どうだった？ 酔ったりしてない？ 慎重に飛ばせたから大丈夫だとは思うけど」

「ありがとうございます、大丈夫でした。振動も感じないほどで……」

ふと、本当に振動を感じなかった事に今更ながら想い至った。路がずつとあの柔らかな砂地だったにせよ、動物が牽いているのだし、多少は揺れたりするものだ。出発時と到着時、フワッと



イヤな感覚と大きめの衝撃があったが――

「え、これ、空を……？」

「そうだよー！ 景色キレイだったでしょ」

残念ながら見ちゃいない。偶に視界に入るのは空ばかりだなとは思いはしたが。

「セルビアくんの調教した子はホントに優秀だね。上空は突風だって吹くしもっともって揺れるもんだけど、上手に飛んでくれるんだよねえ。はい、お水」

「あ。ありがとうございます」

「あいさつする？」

「え？」

「そうだね、あと半分くらいあるし、挨拶もしといた方がいいかもね？」

エイラ達を運んでくれたのは、一匹の大きなトカゲ……ではなかったようだ。

「良い子だろ？ 見てよ、小さいけどほら、君とよく似た角が生えてる」

さらさらのトカゲ肌に、大きく艶々した、けれど鋭利な印象の瞳。びったり閉じられた水気のない口元。大きな体に対してかなり小振りな、エイラと同じくらいかそれよりも小さな、黒の巻角。

厭な予感に小さく震える。

だって、トカゲじゃないならばこれは、角が有って空を飛ぶ爬虫類なんていったらこれは。

「翼もなく空を飛ぶドラゴンっていうとコールド辺りが有名だけど、こいつらも中々友好的な種でー…」

「ドラ、ゴン…！」

「…あ。」

ああ、やはり。ドラゴン。幼い頃から物語や教会の教えの中に出てくる、悪の権化。

悪魔の牽く乗り物だった！悪魔に身を委ねてしまった！この少年は悪魔使いだった！それよりも！

「先生！コレっ、この角ッ！はや、早く切り落としてっ！切り落として下さい！」

「エイラくん、落ち着いて。落ち着いて」

落ち着いてなんていられない。これは悪魔の角だった。嗚呼聖霊よ、私は悪だったのしょうか…！毎日欠かさずあなたに祈りを捧げ、教えを尊び遵守してきたこの身は、何故に悪を宿したのでしょ！

「どうしちゃったの、エイラ」

セルビアは目を瞬かせてフェディットに尋ねた。

「ええとね、うーん、エイラくんはイエソドの出身でね…察して」

「イエソド。あつ！『ドラゴン撲滅運動』！」

セルビアは怒り気味にその単語を口にした。

数十年前、イエソドで盛んに行われたドラゴン狩り、種の絶滅を意図した大虐殺である。その非道は世界からもバッシングを受け、当時戴冠直後だった大国ケテルの煌王が発令した『ドラゴン撲滅運動撲滅運動』によって終息した。

何か言いたげなセルビアを手で制して、フェディットはエイラを座席に押し込んだ。

「エイラくん、落ち着いて。それはドラゴンの角という訳じゃないし、ここで直ぐには切れないし、取り敢えず病院まではあの子に運んで貰わないといけない」

完全にパニックを起こしているエイラは、でも、でも…と要領を得ない言葉を繰り返す。

「善であれ悪であれ、あれはよく調教されているので。大丈夫、心配要らない！はい、水でも飲んでちよつとゆつくりしてて」

そう言つて一度また外に出る。今度はセルビアのフォローをしなくては。

「いやあごめんねセルビアくん。下手を打った」

「生き物に善も悪も無いよ。なにあれ！」

ドラゴンの首筋を優しく撫でながら、セルビアは口を尖らせる。

「まあ、ローチがキライ！みたいなものさ。刷り込みだね。いや／＼そうだったそうだった、彼らはドラゴンが苦手だったんだっただけ……は」

「……………」

セルビアは少し視線を逸らせて暫し沈黙すると、ひらりと御者台に乗り込んだ。

「あと半分」

「ああ、宜しく頼むよ」

エイラは名前を聞くまで、姿を見えてもドラゴンと解っていなかった。つまりはそれが、現在の現状——…ドラゴン撲滅運動の成果なのだろう。

「…ああッ、くそッ！」

名状し難い苛立ちとモヤモヤを抱えたまま、ドラゴン嫌いの少女を乗せて竜車は砂地を走り出した。

辿り着いたのは大きな白い建物。二階建てくらいだろうか、ひたすら横に広いこの建物群が、目指してきた「病院」らしい。

宛がわれた病室は一人部屋で、やっぱり少し広くて落ち着かなかった。

それからは検査、検査、検査。結果は全て、「問題なし」。外見の変質以外、人体として何ら異常はない、ということらしい。それならそれで構わないが、とにかくその外見の変質こそを治して欲しい。そう訴えているのだが。

「角の切除はまあ出来る…けど…うーん。目の回りの皮膚は移植することになるけど、なんにせよこの辺り、美容整形手術になるからねえ。…で、そこまでやっても、眼球の変色に関しては打つ手がない」

と、先生はあまり乗り気ではない。

「理由が解らないんだよねえ、変質の理由。角質の硬化、なんてレベルでもないし。それが解れば打つ手も出てくるかも知れない…かなあ？」

「……」

エイラは押し黙る。

理由なんて解らない。あの日特別変わった事をしたわけでもないし、その前も、全くいつも通

りの日常だった。

「処でエイラくん、眼帯を外して何日か経つけど、まだ眩しさは感じるかな？」

「あ、はい。変わらないです」

ホテルで一度眼帯を外した時に感じた眼を刺す様な眩しさは、病院に着いて眼帯を外したまま過ごすようになっても一向に慣れる気配は無かった。

先生は悩ましげに唸る。

「検査では異常はないんだけどな。心因性の視覚過敏……でも左目だけってなあ……」  
これもまた、原因不明だ。

何処までも続いているような、中身のぎっしり詰まった本棚の回廊。時の流れさえ異なっている独特の雰囲気の中、近付いてくる足音が一人分。

「おや珍しい。君が必要とする本なんて、もう此処には無いんじゃないか？」

知恵の塔の知識の貯蔵庫、世界最大の図書館の管理人は、見事な赤髪を揺らして訪問者に問いかけた。

「今や君が幻術における最先駆者だ。世界最先端の研究者。学ぶ先が無いのは大変だろう」  
「いえいえ。何処からでも、学び取れる事はあるんですよ。学ぶ気さえあればね」

「殊勝だな。つまらん。で？ 苦勞しているようだが、何をお探して？」

この司書は、この図書館の膨大な貯蔵書を全て覚えている。まあ勿論、精確さには多少の揺らぎは有るにせよ、何しろ量が量なのだから十二分に称賛に値する。

「人間に角が生えた、というような話は聞いたことありませんか？」

司書は暫く眼を閉じてトン、トン、トン……と数度指を動かした。

「…言い伝え、民話、童話の類いであれば有った気がする。いずれも同一のタイトルが付く。

『片角の魔王』と呼ばれる南の逸話だな」

「片角…！」

眼を見開いた幻術師に、司書は多少の興味をそそられたらしい。幻術師はイエソドで体験した珍事を司書にざっと説明した。

「なるほど。君、解き明かして書に纏めるといい」

「いやいや、多分ケセドの医者たちがそのつもりでしょう。譲りますよ」

そりゃそうかと笑う司書の元に、空を舞って三冊の本がやってきた。

「待たせたな。残念ながら一冊は相当な古書だ。貸出は出来ない。この場で読んでいけ」

「ありがとうございます」

別々に手渡された二冊と一冊を受け取って、テーブルへ向かう。その背に司書は一声かける。  
「顛末は教えてくれよ」

「いやちゃんと、何か解ればいいんですけどね」

検査の隙間時間は暇だろうという事で、先生はいつも適当に本を置いていつてくれる。児童書だったり哲学書だったりするので、本当にテキストに選んでくれているらしい。これはこれで、今回はどんなセレクトだろう、という楽しみも生まれている。

因みにこの国の文字は、偶に読めない。喋る言葉は同じなのに不思議だと思ったが、よくよく見て考えると読み解けたりするから、強い癖字のようなものだ。物語などだと大体の流れは解るから文字も予測しやすい。

持ってきて貰った本を漁る。眼を引いたのは、ピンク色の風船みたいな生き物が表紙の児童書だ。釣り上げられたピンクの化物が軍人に助けられて、人に化けて会いに行き、自らの鱗で作った防具で彼を援けるも、正体がバレて逃げ出す――…そんな話みたいだ。魚の化物だろうか。人に化けるなんておぞましい。化物に情けなんてかけるから化かされるのだ。そうなのはいけないという教訓の童話なのだろう。しかし何故化物をこんなに可愛らしく描くのだろう。そんなことを考えていると、じわじわ眠たくなってきた。最近眼を使うと直ぐに疲れて眠くなってしまう気がする。これも報告しなくては。

間もなく、エイラの意識は落ちた。



眼が覚めると違和感があつた。

とても久し振りの感覚。

ああそうだ。眩しく、ない。

この変質した左眼が、漸く光に慣れたのか。窓から外の様子を眺めてみる。

「……………え」

眩しくはない代わりに、変なものが見えた。小さな小さな青色の、半分透けた犬のようなものが空中を駆け回っている。他にも、やはり半分透けた白い鳥や黄緑の虫が空を悠々と泳いでいる。

——幻覚…？

その透け具合は魔術師が見せてくれた手品によく似ていた。

——ああそうか。私、まだ起きていないのかも知れない。

眼を擦ってベッドへ戻る。夢。きつと夢だ。色々あつて疲れているから、こんな変な夢も見るとも知れない。

そうしてもう一度眠りに落ちる。次に目が覚めた時には、やはり世界は眩しくて、『変なもの』は見えなくなっていた。

## 『片角の魔王』。

今ではマルクトと呼ばれる地の何処かにあるという小さな村では、極稀に角のある子どもが生まれるという。通常生まれた時から2本の角があるが、更に稀に後天的に角が生える者もある。後天的に角を得た者は片角で、角の周りが変質する。片角の者はその外見的特徴から「魔王」と呼ばれた。

しかし角が生えている以外は特別な事はない。

唯一本人たちのみが知るところでは、変質した瞳で静天の時に世界を見ると精霊が視認できるという。

三冊分の内容を統合して推察すると、凡そ上記の通りだ。

「マルクト発祥かあ、聞かないワケだ」

『国』としての最南端はイエソドである。いくつか集落が存在するにしても、マルクトの地に管理者はいないし、遠く離れた集落同士で交流もない。こうして書が三冊も存在しただけ奇跡のようだ。治し方や原因に纏わる話は載っていなかったが、流石に仕方がない。

内容を手紙に纏めて、マルジュへ送る。ケセドへの郵送は人間を介した方が確実だ。一度使い

魔で済ませようとしたら、途中で消えてしまった。あの国は少し魔術が使い難い。ふと、自分で書いた一文が蘇る。

『変質した瞳で静天の時に世界を見ると精霊が視認できるという』

魔術を扱う者としては、なんとも羨ましい話だ。

その眼で見たら解るのだろう。ケセドから、神秘が失われつつある現状が。

「なあるほどねえ。マルクト由来の奇病かあ」

塔からの手紙を読んで、フェディットは深く息を吐いた。

世界の南端に広がる大草原。世界樹セフィロートのお膝元。異界に繋がるという大湖がある、未だ神秘の色濃い地。

「エイラくんも落ち着いてるし、調査に行ってもいいなあ」

未解明の症例が他にもあるに違いない。その為の調査なら、旅費も経費で落ちるだろう。

「お手紙、何を書いてあったんですか？」

「ん？ ああごめんね。エイラくんと似たような症例が過去にもあったみたいだ」

そわそわと待っていた少女に説明するのを忘れていた。かいつまんで内容を教える。

「こっちでは見付けられなかったけど、流星は塔だねえ。君も頑張っってさ」

エイラは自分宛にも一言あったことに頬を緩めたが、すぐにシュンと視線を伏せた。

「この眩しさについての記述はなかったんですね」

「静天時に精霊が見える——つていうのにヒントがありそうだけどね」

「それは——」

それは多分、アレの事だ。

どうやら夢ではなかったらしい。エイラには精霊というのが何なのかよく解らないが、言われてみればあの時は静天だった、気がする。ずっと見えているようになるわけではなさそうでホッとした。あんなものがずっと視界に映っていたら、気が変になりそうだ。

「それで、先生はマルクトまで調査に？」

「行きたいなあとは思うね」

せめてもう少し範囲を絞り込めればいいのだが。マルクトというだけでは広すぎる。該当の村を見付けるだけで何年もかかってしまうだろう。

「エイラくんは行ったこと——ないよな、うん」

「はい」

ウォートバランサー……所謂イエソドの『中』の一般市民が壁を越えることはまずない。恐らく両親だつてずっと『中』で生きてきた筈だ。それがなんだってマルクトの奇病を拾ったのか。

「外からのお客さんを迎えたことは？ 街として、でもいい」

エイラは顎に人差し指を当てて記憶を辿る。自宅ではまずない。エイラを診に来た医師たちが初めてだった。

「あ、ターミナルの参拝者は迎え入れているので：街としてはそこそこあると思います」

「うーん、そうなんだ」

フェディットは苦い顔をする。

現在、イエソドは外国人の参拝を受け付けていない。あくまでイエソド国内の人間に限られている。エイラの発言から鑑みるに、ウォートランサー以外はイエソドに非ず：という教育方針が進んでいるのだろう。

「現状ヒントがないなら行ってみるしかないかなあ」

問題は旅程だ。ケセド医団としてもマルクトへは行ったことがない。国として存在しない地に出向く理由がこれまでなかった。つまりマルクトターミナルは使えない。イエソドターミナルも転送許可が下りるのは医団として出向く時のみなので使えない。最短ホドからの出発になる。そこからは空路が理想だが、騎乗のスキルは持っていないし、やはり高くつく。かといって海路を用いれば時間が掛かるし、陸路であればそれ以上。宿泊費も嵩む。

フェディットは研究に主体を置いた医師で、現在担当患者はエイラだけだ。エイラにこれといって不調の兆しがないなら、長期間側を離れることも――

「連れていけばいいじゃない」

「は？」

医師会総長は、フェディットの悩みを一蹴した。

「君が研究対象として迎え入れたんだから、責任もって面倒をみる」

「はあ」

エイラくんに関して、聞いたことの無い症例だったけれど意外と『何もない』ので興味を失っているな、とフェディットは感じた。

「研究費に関しては丸々経費でとはいかないけど、僕からも融資するし。行っておいでよ」  
「ありがとうございます」

まあ金を出してくれるならば問題はない。…いや。あの世間知らずの少女を連れての旅か。少し考えてしまうが、結局、フェディットは熱心な研究者であった。

「というわけだからエイラくん、悪いけど付き合って貰っていいかな？」

「……………え、」

フェディットから話を聞いたエイラは、何故か目を丸くして頬を染めた。

「……？」

今度は何を踏んでしまったのだろうか、フェディットは笑顔の裏で冷や汗を流す。

「……………お、…おっ……………」

目をグルグルさせながら、真っ赤になって絞り出したのは

「男の人とふたりきりで旅行と言うのは…ッ！あ、そ、それとも先生は私を貰ってくれるつもりでしょうか!?」

「……………」

どつと冷や汗が表面化する。

「エイラくん、落ち着いて。うん、落ち着こう。落ち着こう」

自分に言い聞かせる如くそう繰り返し、細く長く息を吐いて目を閉じた。

——そうだった、そうだった。

検査の時にも何度か味わったのに、すっかり失念してしまっていた。

イエソドに限らず南方の人間は、性別を強く意識している。異性としか恋も結婚もしないと聞く。同性であればセクハラも許容されてしまうとか。

性別の所為で四十路を越えた自分が十四の子供にそんな風に思われるのは心外だ。確かに研究熱心が崇つて未だ独り身ではあるが、断じてそんな趣味はない。

「親子ほども年の差がある、しかも患者に、手は出さないよ…。そういう心配は要らないから。ほんと、それだけは大丈夫だから!」

「…年の差は…珍しくない程度だと思いますが…はい」

ころなしに、頷くエイラは少しムスツとしている。慌てて全力で拒否してしまった事は失礼だったなと思ひ至りつつ、大人しく納得してくれたことに安堵した。

「それで、取り敢えずターミナルでホドまで行つて海路を取ろうかと思うんだけど」

「それだと着いてからが大変じゃない?」

突然割り込んだ声に目を向けると、本を抱えた少年が立っていた。

「セルビアくん。来てたのか」

「そろそろ次の本渡そうと思つて。入つていい?」

入室の許可を求められ、フェディットはエイラへ視線を向けた。此処は彼女の個室だ。許可を出すのは彼ではない。

「あ、はい。どうぞ」



「お邪魔しまーす」

抱えていた本を適当な所へ下ろすと、フェディットの隣へ座り込んだ。

「僕を雇えばいいと思うんだよね」

「それが出来れば楽なんだけどね」

セルビアはドラゴンの調教師にして優秀な御者だ。知らぬ仲でもないし、専属で雇えるならこれほど便利な事はない。だがそうすると帰路もターミナルが使えなくなる。そして何より、この極度のドラゴン嫌いを説得しなくてはならない。

「帰りはターミナル使えばいいよ。荷がなくなれば速く飛べるし、ひとりでも戻ってきてくれるから」

エイラは解つてない顔で成り行きを見守っている。

「そうしたら『ふたりきり』じゃあなくなるよ」

「!!」

エイラを病院まで輸送したものより大きめの、中で三人横になれる程度の竜車を用意した。牽いてくれるドラゴンも大型でスタミナのある種類だ。万が一の野宿にも対応できる。やはり自家用車があるというのは心強い。

「エイラどうしたの？」

おとなしく——というより意気消沈した状態でぼんやりと車に乗り込んだ姿を見て、セルビアはフェディットに尋ねた。

「んー、実はね」

出立前にと強い希望を受けて遂に除角に踏み切ったのだが、驚いたことに切除後数時間で角は再度生えてきた。初めて生えた時のような痛みはなかったが、やはり一瞬で形成されたその角は、こころなし以前より大きく硬くなっていた。

「だからちよつと落ち込んでるんだ。暫くそつとしておいてあげて」

実際は大層な取り乱しようで『ちよつと落ち込む』どころではなかったが。その原因と治療法を探しに行くんだよと説得して今に至る。

「ふーん……」

チラと車内を気にしながら、セルビアは御者台に乗り込んだ。

「取り敢えず最短空路で直線的に南下、休憩は三時間後。それでいい？」

「そうだね。釈迦に説法とは思うけど、ティフェレトの飛行規定には注意してね」

「了解」

ティフェレトではいくつかの都市部上空の飛行に制限が課されている。他国からの飛行体がその制限に反した場合、撃ち落とされる可能性もある。南北の戦争で板挟みにあった苦い経験か

ら生まれた防衛策だ。世界の中心に位置する国にもたらされるのは、豊かさだけではない。

心に余裕が出てきたのだと、そう思った。

男性と二人で旅なんて破廉恥な。そんなことを考えられるくらいには。今は深くうちひしがれて、狭い車内でふたりきりで揺られていても、ドキドキしたりは出来そうにない。

角は切り落としてもすぐに生えてくる。もしも。もしも解決法が見つからなかったら。もう家には帰れない。外国に行ったまま娘が帰らないなんて、両親は周りから酷い扱いを受けるかも知れない。先生に貰ってもらえるなら、やはりそれは良いことのように思う。ケセドの医者ならイエソドとも繋がってられるし、お医者様に嫁いだとなれば両親にも迷惑は掛からないだろう。

提案を受けた時とは全く別の、何処か意識に靄がかかったような不思議な冷静さで、エイラはぐるぐるとそんなことを考えていた。

こういった思考の迷走は、『現実逃避』と呼ばれている。

三時間飛び続けて漸く主国マルジュを抜け、ガナックに入った処で一度休息の為着陸した。

「丁度お昼だしね。ここから先は暫く砂漠が続くから、この辺りで何か食べておこう」

「マメを大量のスパイスで煮込んだヤツ美味しいんだよ」

竜車が停めておける場所には制限があるので、降りてから少し歩く必要があった。

エイラは最後尾をてくてくとついていく。街中は様々な香辛料が混ざりあったスパイシーな香りで満ちていて、嗅いでいるとエイラも段々と食欲が沸いてきた。セルビアオススめの料理屋に着いた頃には、小さくお腹がくうと鳴った。

「あはは、ずっと座ってるのも疲れるもんね」

空腹を笑われてエイラは顔が熱くなる。

「食欲があるのは良いことだよ。安心した」

フェディットはエイラの背にポンと軽く触れて店の戸を開いた。途端、濃厚な香辛料の香りが脳を揺すった。

「いらっしやいませ！」

「三人分頼む」

「かしこまりました！辛さはどうなさいますか？」

席に案内しながら、店員は注文を取っていく。

「僕中辛」

「エイラくん、辛いのが平気かい？」

「え、はい、多分」

じゃあ中辛ひとつと控えめふたつ、と注文を終えテーブルに着く。

お冷や代わりに出てきたのは乳白色の甘い飲料。サッパリしていて飲み易い。

「ヨググダッスに似た味ですね」

「原材料が殆ど同じなんだよ」

ヨググダッスは病院でもおやつによく出てきた乳製品だ。白いチーズのような見た目だが、サクサクしていて口当たりも軽い。ケセド全域でよく食べられている健康食だ。

「しかし、だいぶ速度出してもらってるみたいだけど全然感じさせないね。セルビアくん流石だなあ」

「うん、あの子障壁の張り方も巧いんだ」

誉められたセルビアは自慢気に胸を張る。それからチラッとエイラを盗み見た。気にした風もなくドリンクを飲んでる。

「エイラ、もうドラゴン平気？」

「複雑です」

「??」

ブスツと答えたエイラと苦笑いしているフェディットを見比べる。

「エイラくんの言うドラゴンと、我々の言うドラゴンは別のものだと説明したんだよ」

イエソドにおける竜とは、悪の化身として祀り上げられた概念、『空想上の存在』。その他の国で言う竜とは、鳥類に連なる『生物』。偶々外見的特徴が重なった為に同名で呼ばれるだけの別物である、と。フェディットはエイラにそう説明をしておいた。既に幾つかのカルチャーショックを体験しているエイラは、その熱心な説明きべんをなんとか受け入れた。

「先生巧いこと言うね」

確かにそういう言い方も出来ると妙に納得させられた。

「そっか僕の差し入れの成果じゃないんだ」

そう言っしょんぼりして見せるセルビアにエイラは訝しげな目を向けた。

「んー、実はエイラくんに持っていた本、毎回セルビアくんセレクトが一冊入ってたんだよね」

主にドラゴン関連の、なるべく竜が好意的に描えがかれたものを紛れ込ませていた。

「…そうだったんだ」

最後まで気付かず読み切ったものもあれば、ドラゴンの一文字で読むのを止めたもの、最初から手を付けなかったものもある。残念ながらセルビアの努力は微塵もエイラに影響を与える事

はなかった。

そうこうしている内に運ばれてきた料理に、エイラは軽く目を見張った。赤みのある濃い色合いのスープはドロドロしていて、パンは全然膨らんでいない。ペッタンコだ。柔らかいクラッカーのようなそれは、皿からはみだすほど大きかった。

エイラが言葉を失っていると、セルビアは食前の祈りも無しにパンを千切り、スープに突っ込んだ。あまりの行儀の悪さに眉をしかめるエイラだが、見ればフェディットも同様にして食べ始めていた。そういうものなのか、と辺りを見回すと、やはりそういうものなようで、皆同じように食している。

「……………」

食前の祈りだけは済ませ、エイラも覚悟を決めてパンに手を伸ばす。

熱い。

千切ろうと力を込めればよりパンの熱が指に伝わり、持っていられなくなる。

「熱いけど、焼きたての内が美味しいんだ」

エイラがグラスを握って指を冷やしているのを見て、セルビアは自分のパンを千切って差し出した。エイラは眉をしかめてそれを断ると、スプーンを手に取りスープに挑み直した。

それはエイラが国を出て直ぐの事だった。中央から下った指示に国中が騒ぎだした。内容は、尋ね人。

国内にいる筈の角の生えた少女を探しだし、中央へ引き渡せ——というものだった。理由は開示されなかったため、市民は口性なく噂した。それは悪魔に違いない、悪魔が入り込んだのだ。そうして、一部過激派による『魔女狩り』が始まった。

角の生えた、十六才未満の女性。恐らくは信心深い者。情報はそれだけだ。充分すぎるほど特徴的だが、角は隠せるのではないかと噂が拡がり、十六才未満の女性は街中から姿を消した。

「……あなた」

「大丈夫、大丈夫だ。あの子は国を出た。特徴を外れるまで帰ってこない。大丈夫、大丈夫だ」蒼白な顔面で、大丈夫と呟き続ける。

もしも。バレたら。あの子も私たちも、どうなってしまうのか。

そんな不安を飲み込んで、エイラの両親は震えていた。



料理は美味しかった。独特な味でだいぶ辛かったが、美味しかったと言える。思い返してみるとエイラの分は辛さ控えめで頼んで貰っていた筈だ。中辛以上はもうなっているのだろう。全く試したいとは思わないが。

「さてこのまま順調に飛べば夕方過ぎには海に着くよ。その先はティフェレト域だから、今日は海岸辺りの町で一泊かな」  
ティフェレト域の海上は夜間飛行が許可されていない。

ガナツクの南端の町に降り立った頃には日も暮れかかって、静かな内海は茜色に輝いていた。  
「…海…」

エイラは呆然と立ち尽くした。茜色の海から広がった砂地が、ずっとずっと続いている。  
「こんな水があっても、砂漠になるんですね」

海を見るのも初めてだが、砂漠がいつの間にか砂浜に変わり海へ続いている様は特に不思議に思えた。

「海沿いが砂漠になる理由は幾つかあるけど、ここはフツーに熱いからだね」  
雨を落としきった乾燥した空気が原因だ。年中高気圧を纏い海からの風を受け付けない。

「そうなんだ」

セルビアも改めてその砂地を見渡した。砂の国に生まれた彼は、砂の広がる光景に理由を求めたことなどない。

「さあ、本格的に冷えてくる前に宿をとっちゃおう」

夕飯時。串焼きにされた肉に「ちょっと固い」と言いながらかぶり付くエイラを見ながら、セルビアは開きかけた口を嚙んだ。それが何の肉であるかは伝えない方がいいのだろう。そう思いやれる程度にはエイラのこと解ってきたらしい。フェディットもそんなセルビアの様子にホッと息を吐いた。本当に大切なのは相互理解だが、今は片側の理解だけで充分だ。せめて旅の間は変に衝突して欲しくない。心の中でセルビアに謝罪と感謝をしつつ、フェディットはトカゲ肉の串焼と大サソリの雑炊を食べ切った。

翌。

朝の陽を受けてキラキラと輝く海を渡る。

「二、三時間も飛んだらティフェレト域だ。一気に空気が変わるよ」

小さく何度か頷きを繰り返して、エイラは眼下に流れていく海を見ていた。そわそわと不思議

な感覚がする。少しだけ。本当に少しだけだけれど。と、まるで何かに弁明するように付け加えながら。エイラは『未知』に対する『楽しみ』を自覚した。

「もうちょつと飛べばリディウムだけど、ここらで一旦休もう」

サルツイエル。出発地点から凡そ三千百、漸く隣国ティフェルト域に降り立った。今までの熱く乾燥した空気とは打って代わって湿潤な、少しだけ蒸し暑くなった空気感にエイラは眉を顰めた。辺りは今までに比べればうんと緑豊かで、植物が植物らしくなってきた。

「エイラくんもセルビアくんも、体調は大丈夫かな？これだけ一気に移動すると体調にも気を付けないとね」

「僕は御者だから大丈夫。エイラは？」

「悪くはないです。……たぶん」

ただただ不快なだけだ。因みに御者だからというのは、ドラゴンにより護られているという意味だ。気圧や気温の変化に対応できるような……いわゆる『魔法』が掛けられている。

「少しでも変調があったら言ってね。早めに対処できたらそれに越したことはないの」

その時。あの独特の高周波がエイラの鼓膜を震わせた。

「！」

パンッ！と見事な炸裂音が響く。フェディットとセルビアは目を丸くしてエイラを見た。エイラは併せた両手をゆっくりと開く。

「……仕留めました」

「お見事」

これまでは暑すぎて居なかったが、此処からは蚊も出る。フェディットは虫除けの薬をふたりに渡した。

「ティフェレト域はごはんが美味しくていいよねえ」

昼食後暫しの休憩を挟んでから竜車は再び南下を始めていた。

「色んな味がして、少し苦手です」

ケセド域も香辛料をふんだんに使っていたが、そちらはスパイシーでエイラも美味しいと感じた。さつき食べた料理に使われていたのは香草類で、ちよつとクセが強かった。エイラには合わなかったようだ。

「そうかい？この調子だと夕飯はリディウムで摂る事になるだろうから、もう一回我慢して貰わないといけないかなあ……あー……」

そう言えばリディウムでは昆虫食が一般的だ。慎重に店を選ばないと、エイラは夕飯を抜くか

も知れない。昨晚の大サソリは剥き身にしてあったが、イナゴや幼虫は姿まるごと出てくるだろう。何せ小さいので解体していたら食べる部分がなくなってしまう。これは味以前の問題で拒否される気がする。食文化の否定は流石に礼を欠く。料理として出てきてからノーと言って欲しくない。とは言えリディウムの端、しかも東側など、観光本さえ見たことがない。フェディットは運を天に任せることにした。

「ああエイラくん。そう言えばそろそろ静天になるけど、やっぱり何か見えるのかな」

「ええと…」

エイラとしては、正直あまり見たいものではない。静天は毎日来るが、怖くてあれ以来試していなかった。だが、今なら確かめてみるのも悪くない気がした。何故なら、ずっと飛竜に揺られているだけの移動時間はかなり暇なのだ。

ゆっくりと眼帯を外す。

「わっ！…わっ！わっ!!」

途端、大量の小虫に襲われたような仕種を繰り返すエイラ。フェディットは冷静に「見えるみたいだねえ」と返した。

東の端とはいえ、リディウムはリディウム。街の夜はそれなりに活気があった。懸念された夕飯問題も奇跡的にミンチ肉で事なきを得、揚げ物が多かったことで多少胃を凭れさせながら街を見て回った。

「ずっと座って食べて寝て…だと体に悪いからね」

「時間掛かってもいいなら歩いてもいいよ。ちゃんと着いてきてくれるから」

今までの速度で行けば明日には予定された道程の半分に到達する。多少休憩を挟んでもいい頃合いだ。

「折角のリディウムだしねえ」

エイラからしてみれば何処も知らない土地で、「折角」の意味は解らない。

「一日…いや、二日掛かるかな。大湿地帯でも見に行く？」

「観測所に頼むと観光案内もしてくれるらしいけど、確か予約制なんだよねえ」

「あそこは見たことない生き物いっぱいいて楽しいよ」

もうすでに周りが見たことない生き物でいっぱいのエイラにはその感動は伝わりにくい。だがこの旅が…長く続くのは悪くはないなとぼんやり思えた。

湿地。それは海とも川ともまた違う、浅く水に浸かった地。広域を占める湿地帯は塔の監視下に置かれ、大部分で開発が禁じられている。

「塔……って、他国域ですよ。どうしてそんな干渉を」

「うーん。ザックリ言うと、昔君の国とゼクトウズが喧嘩した時に、間に挟まれちゃったティフェレト域は大変だね。塔から援助を受けたんだ。その見返り」

エイラはふーんと軽い調子で聞いている。世界の南端と北端。接点など無いような立地で、二国は昔から仲が悪い。各国と付き合いのある分ゼクトウズ寄りに解釈されがちだが、勿論エイラは当然のようにこう思うのだ。そんなに遠くても許せないと思うほどその国は悪い国で、自分の国は正義感のある尊い国なのだ、と。

「ポロポロだったもんね。今も賑やかにしてるけど、ティフェレト域はそこら中に戦禍の痕がある」

セルビアは悼む面持ちで街を眺めている。

「……………」

祈りと平和の中で育ったエイラには戦争のことはよく解らない。漠然と『善くないことだ』とも思うし、反面、正義が悪を倒すのには武力が必要だとも思う。聖霊の写し身が悪を打ち倒す物語は昔から多く創られている。武力を用いた勸善懲悪はエイラに深く浸透していた。そして、

イエソドの教えでは魔術は悪だ。ならば、魔術師たちの集う塔は悪の巣窟だ。つまり、そこへ助けを求めたこの国も、同情する必要のない悪なのだろう。……と考えることに、何故か今は僅かな抵抗があった。脳裏に煌めく金の髪が、屈託ない優しい笑顔が、とても悪には思えなかったからかも知れない。

エイラは考えるのを止めて足元の泥濘に意識を移した。この辺りは沢に似ている。岩に繁茂した藻類を食む蟹が見えた。爪で藻類を削ぎ落とす姿はなんとも愛らしい。もつとよく見ようとその場にしゃがみこむと、陰が出来たことに驚いたのか、蟹がピュッと水を吐いた。顔面に命中した雫を拭うと、もう蟹の姿はない。

「蟹が……水を……蟹ってそんなことしましたっけ？」

「さっきの蟹はするね。威嚇行動のひとつだねえ」

湿地にはそれぞれの固有種が多くいる。今の蟹もそのひとつかも知れない。探せば、まだ塔にも登録されてない未知の種がいるかも知れない。

「次は食べてやる……」

「エイラ、ワイルドだね」

ふたりのやり取りを笑って見守りつつ、……やはり釘は挿しておくことにした。

「湿地生物の採取および意図的な殺生は禁じられてるからね」

この娘はちょっと何するか解らない処がある。



「疲れました…」

「観光用の甘味処があるよ。寄ろうか」

「ああいいねえ」

湿原に敷かれた観光用の歩道を歩いてきたのだが、それが思いの外長い道程だった。渡りきった先には詠えの甘味処。観光客たちは当然のように吸い込まれていく。

甘味処にあったのは、冷えたフルーツジュースだった！エイラは感動に瞳を輝かせる。

「地下洞があるんだね」

「場所によっては鍾乳洞もあるみたいだねえ」

セルビアとフェディットは店の壁に貼られた説明書きを読んでいる。ふたりの会話から、ジュースを冷やしているのは冷蔵庫ではないらしいと察しつつ、エイラは黙ってグラスを傾け続けた。なんでもいい。冷たいものは久し振りで。正直味は微妙だが、冷えているというだけで美味しく感じた。

それにしても。リディウムに入ってから今まで以上にたくさん人がいるが、出会った誰もが角にも眼帯にも頓着しない。今までもそうだったが、エイラにはとても不思議に思えた。

その疑問を口にすると、セルビアが答えた。

「隣に先生立ってるからね」

「？」

首を傾げるエイラだが、ふたりともそれ以上説明する気はないようだ。言ってしまったら、ド派手なシャツを着たガタイのいい男性の連れにケチをつけるような人間はなかなか居ない、ということだ。

「人間なんて意外と何処でも一緒だよ」

「？」

あっけらかんとしたセルビアの言葉の意味も、エイラにはイマイチ解らなかった。

ひとときの休息……というよりは運動、を終えて、三人は再び竜車に乗り込む。竜が飛べない時間になる前にある程度軌道を修正しておかなければならない。

「どうだった？」

エイラが乗り込む際、御者台からセルビアが問いかけた。エイラは少し考えて

「たくさん歩いて、足が痛くなりました」

そう答えた。セルビアは「だよー」と笑いながらエイラの顔を眺め、もう一度満足そうに満面の笑みを浮かべた。エイラがそれに気付くことはなかったが、エイラの表情は「楽しかった」

と確かに伝えていた。

## 10

「ちょっと軌道が変わったから、あと二日もするとウォート balanサーが見えると思うよ。あの建物はとんでもなく高いから、天気によってはそろそろ見えてくるかも知れない。外から見るの初めてでしょう」

「熱帯突っ切らなくてよくなったから寄り道も悪くないよね」

湿地帯は抜けたものの、今居るのはまだティフェレト域だ。改めて広大さを思い知る。

故郷が見えたらやはり帰りたいと強く思うだろう。だが角が健在の間はまだ帰れない。両親に迷惑が掛かってしまう。こんな異形の姿では、イエソドの住民たちは外で出会った人たちのように受け入れてくれないだろう。知らず片角に手が延びる。硬質で温かみのない捻れ角。本当に悪魔みたいだと改めて感じた。それでもなんとか気にせずにいられるのは、鏡を見る機会が殆どない事と、全く気にした風のないふたりのおかげなのだろう。

「先生…」

「うん？」

「……いえ、すいません」

やつぱり私を貰ってくれませんか、と言いたかったけれど。容姿を理由に断られたら立ち直れないから、止めた。

もうすぐだよ。

もうすぐおうがかえってくるよ。

ようやくだ、ようやくだ。

とらわれのおうさまがごきかんだ。

まってました まってました。

木々がさわさわと揺れ、何かが囁き合う。大樹がそれらを掻き消すようにゴウツと大きく枝を揺すった。

遠くにうつすら、空に溶けるように霞んではいるが、確かにセンタービルが見えた。

「……………」

エイラは言葉なくそれを見詰める。

「いやあ流石、高いねえ。イエソド域からなら何処からでも見えるね」

イエソド域の外れに休憩に降り立った三人は世界一の高層建築に感嘆する。いつもその根本から仰ぎ見ていたエイラは、ビルがこんなにも細く見えるのが不思議だった。

「折れそうだねー」

不敬な、とセルビアを睨みつつ、頭の片隅では「確かに…」と思ってしまった自分を戒める。

「実際は『大きい』んだけど、こうして見ると『長く』見えちゃうからねえ」

それでも折れることはない。イエソドの技術を詰め込んだ、国家の象徴たる建築物だ。

「まあ今回は素通りだ。里帰りはまだちょっと先で。郷愁に駆られるだろうけど我慢してね」  
絶対に寄ることは出来ない。角を見えなくしてくれる魔術師は今回はいないのだから。何処まで理解しているかは解らないが、エイラは素直に頷いた。

「またちょっと歩くかい？ エイラくん、ウォートバランサーから出たことないって言ってたでしょう」

「ええと」

エイラにとっては外は外である。自国域だからと言って、自国ではない。今まで通ってきた外国と一切差はない。景色を見回しても、アスファルトもなければ車も走っていない。建物も古臭い前時代的な木造で、目に見える範囲に教会もない。繁る草木もなんとなく違う気がする。それでも、センタービルが目に入る。

「…大丈夫です。早く目的地に向かいましょう」

「そうかい？じゃあそろそろ出立しようか」

「よし。じゃあ乗っちゃって」

眼帯を直しながら御者台へ向かうセルビアを見て、何故か今漸く、エイラはそれを気に留めた。突然沸いた疑問を抑え竜車に乗り込む。飛び始めたら、こっそり先生に訊いてみよう。

「ん？セルビアくんの眼帯の理由？」

普通の声量で訊き返され慌てて人差し指を立てる。フェディットは「大丈夫だよ」と笑って返した。

「見たことなかったかな？全く正常なんだけどね、少し人目を引くんだって。なんで着けてるかは、本人に訊いてみた方がいい」

気にせず答えてくれると思うよ、と付け加える。フェディットが教えても良いのだが、折角の会話の機会を取り上げるのも悪い気がした。

エイラは小さく「はい」と答えたが、不服そうな表情は隠れていない。正直な子だ。

「ごめん！揺れるよ！！暫く何かに掴まってて!!」

突然セルビアの大声が響いたと思うと、急速な加重で竜車は激しく傾いた。

「きゃ…!?」

「舌噛まないようにね」

フェディットは軽すぎて吹っ飛びそうになっていたエイラを引寄せ抱き留める。すぐに扉の錠を確認する。かけ忘れてはいない。大丈夫だ。急降下や急旋回、急上昇。これは何者かに襲撃を受けているのだろう。しかし何故…というよりも、どうやって。イエソド域である以上、ドラゴンが敵視されるのはそれほど不思議ではない。だがこの高度と速度で、避け続けなければならぬ攻撃をしてくるのなら。相手も同等の機能を有している事になる。

「何に襲われてるのかな!？」

「飛行機!!」

「飛行機!？」

飛行機と言われて想像出来るのは両翼にプロペラの付いた型で、とてもじゃないが秒速で飛ぶ竜に敵うものではない。大体飛行音も聞こえてこない。時折バババッと大きな音がするが、プロペラの回る音ではなさそうだ。

困惑するフェディットの腕の中で、エイラはぼんやりと「戦闘機かなあ」と思考する。実物を見たことはないが、存在は知っていた。時折聞こえる大きな音は機関銃の放たれる音かもしれない。自分たちが攻撃を受けていると解って、エイラはぎゅっと体を縮こまらせた。

「とにかく逃げる! 向こうだって燃料切れとかあるでしょ! 知らないけど!! ちょっと我慢し



てね！この子は戦闘用じゃないんだよっ」

## 11

出国の際の映像を見直された時は心臓が冷えたが、ちゃんと誤魔化したままの姿で記録されていて、男は密かに深く息を吐いた。妻はストレスに堪えきれず体調を崩した。男も日々胃が痛い、倒れるわけにはいかないと踏ん張っていた。毎日毎日礼拝堂でうずくまり聖霊に祈りを捧げ続けた。なのに、ああ、何故なのか。疲れてしまった妻が懺悔したのか。それも無理もないことだ、責められはしない。突如押し入ってきた執行官に取り押さえられ、その夫婦は連行されていった。

「行き違い、どうやら誤解があるようです」

柔和な笑みを湛えた司教は、数多のモニターを背にして彼らに語りかけた。

「我等は罪を問うているものではありません。『保護』を申し出ているのです」

司教の微笑みだけを見ればそれはなんと救いのある言葉に聞こえるが、現状到底そんな風には思えない。教会騎士に囲まれ、身体を拘束されたこの状態では。

「ですが貴殿方は教会に隠し事をしました。嘆かわしいことです。お話をする前に、少し説法を致しましょう。改めて聖霊の素晴らしさを知っていただければ、お気持ちも変わるものと思いますので」

司教が胸の辺り迄手を上げると、教会騎士はふたりを引き立てて行った。

静寂の訪れた室内で、司教は背にしていたモニター群へ目を向ける。

「困りますねえ。市民の皆様におかれましては、もっと素直であっていただかないと」

滑らせた視線を留めたのは、暗室を映した固定監視画面。簡素なベッド——というよりは台に寝かされた小柄な人影が確認できる。

「特にこんな、国家存続に関わる事態に際しては」

「いやいや、困りますねえ。こんなことをされては。我々は貴殿方を信用して招き入れているのですが」

「……現場の判断に不適切があつた事は認めましょう」

再教育を受けた夫婦は促されるままに全てを口に出し、イエソドは正式にケセド医師会へ抗議を申し立てた。そして会合が開かれたのだが、まさか司教直々に現れるとは思ってもいなかった医師会総長は冷や汗を悟られないようにするのが精一杯だった。

「ええまあ差し当たり、まずは彼女を返還して頂ければと」

「……それが、その……」

義に走って国交を乱すような判断はしないだろうと踏んでいた司教は、言葉を濁した医師会総長に不審の目を向けた。

「原因究明の旅に出たようでした…」

「本気で言ってるっしょ？」

「ええはい、残念ながら…本当なんです」

暫しの取引停止を言い渡し、司教は医師会との会合から帰還した。直ぐに国域中に監視網を敷き詰め、態勢を整える。

「竜車でマルクトに向かっていているそうですから、見掛けた竜車は全て撃ち落として下さい。生死は気にしなくて結構です。角の生えた少女のみ拾って帰ってきて下さい」

マルクト。国外の人間が、どうその答えに辿り着いたのか。教会上層部の一部しか知らない筈の情報を知ったのか。偶然であればそれに越したことはないが、そんな樂觀は非現実だ。

「…：塔の魔術師…」

可能性としてはそこだろう。まったく迷惑極まりない。

「困りますねえ」

司教は何度目とも知れない溜め息を吐いてモニターを見回した。

「はあ!? 何処まで追ってくるんだよ!」

セルビアは悪態を吐きながらアクロバット飛行を繰り返し、なんとか攻撃を避け続ける。燃料も弾も無限なのかと疑いたくなる。イエソド域から離脱しても尚躊躇いなく追って来ていた。速度は同等か、ほんの少しこちらが速い。ということは、荷を離せばなんとか引き離せるかも知れない。しかしこの竜に三人乗りはかなり厳しい。それに、ふたりは竜に跨がったこともないだろう。そもそも、乗せ替える隙もない。

「ああもう!」

このままではこちらが先に燃料切れを起こしてしまう。ここは境際とはいえホド域だ。応援が貰えれば助かるが、ティフェレットと違い空域侵犯に過敏な国ではない。望みは薄い。

「僕が何とかするしかないか!」

急下降で地面を目指す。幸い民家のない丘陵地があった。車内から一際悲鳴が上がったが、ごめんと謝る余裕もない。接地する瞬間は確実に狙われるだろう。高さを見計らって御者台から滑り降りる。

「ごめん、一瞬耐えて!」

指示に従い、竜は車部分に覆い被さるように着地した。セルビアは銃撃を放ちながら迫り来る

機体をまっすぐ見据えて地に手を着く。

「お願い！『助けて』!!」

直後。

眼前の地面は盛り上がり、巨大な何かがうねりながら立ち昇る。深紅の巨大な蛇——それが竜だと認識出来る頃には、それは上半身をしながらせ敵機を叩き落としていた。機体の損壊を確認した後、竜はスルスルと頭部をセルビアに向かわせた。

「助けを求めたな」

「うん。ありがとう」

その鼻面に手を乗せ礼を伝える。竜は金色の目をゆっくりと細めた。

「代償は解っているな」

「うん。三人分の命と引き換えだから仕方ないね」

それを聞いた竜は怒気を孕む。

「自分の命は自分の為に使えとあれほど——」

竜車に目をやり、深紅の竜は言葉を無くした。窓から二人の姿が確認できる。

「……随分なモノを連れているな。イエソドから拐ってきたのか？」

「違うよ人聞きの悪い！」

ざっと経緯を説明するが、聞いているのかいないのか。竜の視線は車内に釘付けだ。

「王の帰還か。どうりで小虫どもが騒がしい」

「え？」

「代償の無駄払いだな。いいか、今度こそよく聞いて守れよ。自分の命は、自分の為に使え」

「どういう……ちょ！」

言うだけ言って、竜はシュルツと地へ消えた。

「もう大丈夫、かな。そろそろ出て行ってみようか。エイラくん？大丈夫かい？」

「…腰が抜けました」

エイラを抱き留めたままだったフェディットは、エイラからその光景が見えないように巧く位置を調整していた。折角セルビアに対する態度も和らいできているのに、あんなものを見せては大惨事だ。

「だいぶ振り回されたからね」

幸いふたりとも嘔吐には至らなかったが、三半規管もだいぶやられている。まだ立てなくても仕方がない。そっと身を離し、落ち着くのを待つことにする。

フェディットはあの竜を知っていた。見たこともあるし、話にも聞く。沙漠の赤蛇。砂の赤竜。ケセドから西側の沙漠に棲む砂竜の玄獣だ。何故遙か離れたこんな場所に現れたのか解らない

が、セルビアと話をしているようだった。竜の扱いが上手いのは知っているが、まさか呼び寄せたのだろうか？

「あー焦ったあ。ふたりとも大丈夫？」

セルビアは暢気に戻ってきた。フェディットはチラとエイラに目をやってから、解るまいと高を括って問い掛けた。

「セルビアくん、カルキストだった？」

問われたセルビアはきょとんとしてから笑った。

「違うよ。先生知らないの？カルキストはもういないんだよ、ケテルのふたりが最後」

「うん、そう言われてるよねえ」

カルキストは召喚士、玄獣使いを指す言葉だが一般常識的な単語ではない。一般人にも通じるのはケテル域くらいのものであるからセルビアに通じたのは上々だ。

しかし召喚タクリタンの神はもう居らず、その加護を受ける召喚士カルキストも今は世界にふたりしかいないという。

予想通りの否定を受けて疑問が増すフェディットにセルビアは親指で自分の背後を指し示した。

「飛行機、見てみる？」

望みは薄い、操縦者が生きているかも知れない。生きていても重傷だろうが、仮に敵意を向けられても機体さえ無ければ竜を連れているこちらの方が有利だろう。

「…そうだね、一応ね」



自分の命を狙った者まで助けたいと思うような人格者ではないが、聞ける話は聞きたいと考えた。

「…人は、乗っていないのではないでしようか」

「え？」

「あ、いえ、解らないですけど」

エイラは目を細めて墜落機を眺め、それから遙かなセンタービルの陰を探した。

「詳しくはないので違うかも知れませんが、ああいう戦闘機は大概自動追尾か遠隔操縦かと。

オペレーターが人間か否かも解りませんが」

フェディットもセルビアも『？』がいつぱいの表情だ。まるで異種生物の鳴き声を聞いたように、言葉の意味が全く理解できない。それを見たエイラも彼らが何を理解出来なかったのか理解出来ず慌て出す。

「ええとええと、それで、つまり、撃墜された事は既に把握されている筈なので、早く離れた方がいいと思います！」

「なるほど！」

「すぐ発とう。なるべく迂回してイエソド域には入らないように行く」

エイラの端的な指示にふたりは迅速に従った。

## 13

それから少し飛ばして、山林で一晩過ごすことにした。頑張ってくれた竜を休ませる為にも早めに休息を取る。今日は車内泊だ。非常食は積んである。セルビアは竜の世話で忙しくしており、エイラとフェディットは車内でのんびり話をしていた。

「要は、人工の使役獣みたいなものかな」

ウォート balanサー式戦闘機の説明を受け、フェディットはそう理解した。その呟きにも否とも言えずエイラは曖昧な音を発してやり過ごす。

「しかし、何故攻撃を受けたのか皆目見当がつかない」

「ドラゴンだったから…？」

自国域に侵入した悪魔を討つ事は全く当然の自衛で、エイラには不思議はない。人が乗っていても、それは悪魔使いなのだから共に攻撃を受けても仕方がないことだ。

「うーん」

フェディットからすれば、ドラゴン撲滅運動で世界中から強く叩かれた過去があるのだからそんな理由でそう簡単に…しかもあんなにしつこく撃ち落とそうとするとは思えない。イエソド域を脱しても追ってきたのがどうにも納得がいかない。なんにせよ、今後よくよく警戒しなければならぬだろう。

「よいしょっと」

「え!？」

樹上から目の前に飛び降りてきた人影に、セルビアは目を見開いた。竜が警戒していないので特にだ。落ちてきた人影は見た感じは少年で、装いは魔術師に近い。大きな杖も持っている。だが直感的に「人間ではないかもしれない」と察せられた。

「キミかあ、砂の赤竜を呼んだのは」

「ええと」

呼んだ場所からこの山は随分と離れている。情報伝達が早すぎる。突然現れた謎の少年に肯定を返すのも躊躇われ曖昧に答えるも、彼は端から返事を求めているようだった。

「困るんだよ。それぞれ領域<sup>テリトリ</sup>つてもんがあるんだ、こっちには」

ジトツとセルビアを睨むと、

「ん？ あれ？」

何かに気付いて眉をひそめた。

「なんだキミ。竜か？ 人間か？ 竜人<sup>シヤング</sup>なんて事はなさそうだが」

無遠慮にジロジロと観察される。

「人間です」

「そうかあ？ 怪しいなあ」

瞳は懐疑的だがそれ以上追及する気はないようで、少年は話を戻した。

「まあだからオレたちには領域があつてだな。砂竜も然る事ながら、だ」と、竜車を親指で示す。

「アレの持ち込みは非ッ常々〜に困る」

『アレ』……って、角の生えた？」

今はカーテンが閉まっていて車内の様子は外からは見えないが、赤竜も興味を示していたからエイラの事だろうかとあたりをつける。少年はひとつ肯いた。人ならざるものの興味を引く彼女は一体何者なのだろうかと感じつつ、セルビアは取り敢えず少年に事情を訴える。

「ええと、マルクトへ行く道中なんだ。暫くしたら出ていくから、少しの間見逃して欲しい」

「……………」

それを聞いた少年は痛ましそうに目を伏せた。

「……気の毒だけど、もうアレの居場所はイエソドだけだ。故郷には戻れない」

「え？」

エイラの故郷はイエソドだと聞いている。少年は何か勘違いをしていそうだ。

「もう意識も残ってないと思つてたけど……そうか。還りたいんだな……」

独りごち、ぎゅつと強く目を瞑った後。少年は身を翻した。

「解った。なるべく早く通過してくれよ。意外と苛々するんだ、領域侵犯されていると」

「あ、ありがとう」

セルビアがそう言い終わる前に、少年の姿は消えていた。

「おやセルビアくんお疲れ様。ドラゴンの調子はどう？」

「うん、タフな子だからね。一晩休んだらきつと大丈夫」

返しながら、セルビアの視線は自然とエイラに向かう。赤黒い捻れ角。突然生えたと言っていた気がする。ともすれば、自分もいつかこんな風に――

「…なんですか？」

「ううん。エイラは大丈夫？ だいぶ振り回しちゃったから」

「問題ありません、先生が守ってくれたので」

そっか良かった、とセルビアはタオルケットを引き寄せ、車内の隅へ移動した。壁に凭れ掛かって寝ようとするのをフェディットが慌てて止める。

「セルビアくんも疲れてるだろ。ちゃんと横になって寝た方がいい」

「え、でも狭いかって」

「うん僕が大きくて申し訳ないけどね、三人横になれるくらいの余裕はちゃんとあるよ」

三人並んで寝転がる。こうしてみると改めてこんな荷物を持って高速で飛行する竜の凄さを知り知る。

「ふふ…」

暫くして、セルビアの擦ったような笑い声が漏れ聞こえた。

「なんか、いいね。皆で寝るの」

「そうかい？」

フェディットは一人でしつかり質の高い睡眠を取りたいと思う。

「うん。なんか…あったかい」

返事も曖昧な音でしかなく、次第に眠りに落ちていく。エイラは「異性と寝室を共にするなんて」と戸惑いながらも、セルビアの呟きに心の奥でこっそりと頷いた。お父様やお母様と一緒に眠っていたこどもの頃のように。傍に人のいる安心感は決して悪くないものだ、と。

遠い日の、温かな日向の夢を見た。柔らかな土の匂い。草原の上で皆でお昼寝。木登り。かけっこ。川遊び。懐かしい景色。

でも、そう、これは夢。だって私、こんな景色知らないもの。そんな事した覚えもないもの。

それなのに、これの続きを知っている。この先は見たくない。温かい記憶のままここで止めて  
おこう。停止ボタンは何処だろう。早く。早く止めないと――

あの女が 来る

## 14

金縛り一步手前の寝苦しさで意識が浮上した。両脇から両腕をホールドされているらしい。そつと引き抜き、上半身を起こす。ふたりを起こさずに済んだことに一息吐いた。

カーテン越しに早朝の仄かな明かりを感じる。寝直す必要はないだろう。セルビアはいつもは眠りが浅い印象だが、珍しくぐっすり眠っている。よっぽど疲れていたのだろう。それも当然だ。気楽な道行きだった筈がとんだ目に遭ってしまったものだ。

抱き枕を失った所為か、微かな吐息と共にエイラが目覚めの兆しを見せる。ぼんやりと覚醒を待つ間にフェディットはざつと自らの髪を整えた。

「…………おはようございます…」

目を擦りながらエイラも上半身を起こす。

「おはよう。早いね」

エイラは寝惚け眼のままひとつ頷き、うんつと大きく伸びをした。

「顔を洗ってきます…」

「いやちよつと待って。セルビアくんも起きてから皆で行こう。深くない場所とはいえアッシャーの山脈だ。何が出てくるか解らないからね」

止められて、エイラはタオルケットに顔を埋めた。寝起きの顔を異性に見られるのは酷く恥ず



かしい。が、その動作中に腕に角が触れてふと冷静になった。そうだ。こんな角と左目をしていながらそんな事を気に掛けるなんて笑い話だ。タオルでささつと顔を拭いて、開き直って顔を上げる。すると、丁度今起きたばかりのセルビアと目があつた。

「…おはよう…」

「」

不明瞭にあいさつをするセルビアに、エイラは口を開いたまま声が出ない。藤色の左目と、金色の右目。セルビアの眼帯は外れていた。

ふああ、と大きな欠伸をしながら髪を乱し、もう片方の手で手近な場所をてしと探る。そうして見付け出した眼帯を嵌めて事も無げに立ち上がった。

「んじゃ、水場に移動しよっか」

朝の山林は瑞々しく少し肌寒い。川辺ともなれば尚更で、朝霧が立ち込めていた。

「わあいかにも出そう」

「やめてよセルビアくんが言うとホントに出かねないから」

火を起こし水を煮沸する。そのまま飲めそうなくらいキレイに見えるが念の為だ。エイラは特にお腹が弱い。竜は下手で川からガブガブ飲んでいる。

フェディットが飲み水を用意している間にエイラは洗顔を終え朝の祈りを捧げていた。川水は

冷たかったが目を覚ますには丁度良かった。

熱心に祈るエイラを邪魔しないように眺めていたセルビアだったが、祈り終わったエイラと目があつてヒラヒラと指先を振つて見せた。

「エイラ今日機嫌いいの？」

「え？ はあ。悪くはないです」

何せ夢見が良かった。なんと畏れ多くも聖霊を夢に見たのだ。その威光たるや言葉にも出来ず、ただただ尊く耀かしかつた。夢見の原因はセンタービルを見たからだろうとは解つていても、我らが聖霊はこんな私でも見棄ててはいないと思う事が出来た。その嬉しさは朝の祈りをいつもより更に念入りにさせた。

うんうんと頷くセルビアは洗顔後で、今も眼帯を外している。そのオッドアイに驚いたものの、例えばエイラの左目のような痛々しさやおぞましさはなかった。

「……眼帯。どうして着けてるんですか？」

「皆驚いちゃうからね」

エイラの振り絞つた質問にもセルビアはあつさりとは答えた。

セルビアの金の右目は怪我でも病気でもなく、機能も至つて正常だ。眼帯をファッションとして好んでいるというわけでもない。因みに眼帯はよくよく見れば小さな穴が幾つも開いていて、装着していても内側からは見える仕組みになっている。装着の一番大きな理由は『他人の好奇

心から身を守るため』だ。

「……そうですね」

察したエイラはそこで話題を終わらせた。

見ればとくに湯は沸いていたらしく、フェディットは悠々とお茶を飲んでいる。朝靄も薄らいで、鳥たちも囀り始めていた。

「山脈沿に南下する？」

「エイラくん。あれは遠隔操縦だって言ってたけど、どのくらいの範囲とかあるのかな」

「すみません、詳しくは…」

意見を求められるのはとても嬉しいのに、応えられず気落ちする。とはいえ、どう足掻いても戦闘機に興味を持つような生活はしてこなかった。仕方ない。

陽の届き始めた川辺で地図を囲んでの朝食タイムだ。パンを嚙りながら進路を確認している。

エイラは馴染みのない世界地図を不思議な気持ちで眺めていた。ウォート balanサーが小さな小さな点でしかない世界地図。今まで自分の全てだった世界がこの小さすぎる点なのならば、此処まで旅してきた世界はとてつもなく広い。たった数日で移動してきたことも信じられないほどに。初めて世界地図を見た時は完全に縮尺を疑った。

「よし。じゃあ山脈の西側を行こう。ちょっと回り道だけど、あれは恐かったからねえ」

「じゃあ迂回の為に少し戻るよ。流石にこの山脈は跨げない」

内陸から今度は西側の海岸線を行く。眼下には切り立った崖も見えるが、打ち寄せる波に、例えば塔のお膝元ワナー程の荒々しさは感じない。

「あれ！先生、見てください鳥が海を泳いでます!?!」

「ああ、ホド域からマルクトにかけて生息する鳥だね。海を泳げる代わりに空は飛べないし、陸上での歩行も覚束なくてね」

へえ、と素直に感心するエイラに、フェディットは確かに変化を感じていた。遠慮が取れてきたというか、外の世界に馴染んできたというか。こどもにしては頑迷で思考が凝り固まっていたエイラも、段々と『こどもらしさ』を取得しつつある気がする。良い変化だと思いたいが、フェディットとしては心配でもある。

帰る日が来たら。『外』に馴染んでしまった場合、またあの檻で生きていけるのだろうか。

## 15

酷いノイズだ。まるで砂嵐。

今では使われない旧式機器のようなノイズの所為で音も映像も拾えない。位置情報の取得すら遅延が生じて跳び跳びだ。操縦士曰く映像の方は追跡中は鮮明に見えていたそうだが、録画データがイカれていたらしい。どんな童車だったか、何が起こったのかは操縦士の記憶頼り。最後の瞬間に関しては操縦士にも何が起こったか解らなかったという。とにもかくにも逃げられた。それだけは解った。

「困りますねえ。なるべく早く戻って頂きたかったです」

穏やかで優しい声と話し方だが、控えた教会騎士たちは即座に身を正した。

「仕方がありません、先に終着点<sup>ゴール</sup>でお待ちしましょう。ああ、搜索と追跡も引き続きお願いします。なるべく早く戻って頂きたいので」

は、と短い返事を残して教会騎士たちは退室していく。それを朗らかに眺めながら、司教は祈りの形に手を動かした。

「どうか、聖霊の導きのあらんことを」

「なあ君。『魔王』というのは、如何にも妙だと思わないか」

「はあ」

図書館に立ち寄ると、入口で司書に絡まれた。どうやら先日の閲覧後、あれらの文献に自らも目を通して見たらしい。

「魔を統べる者という意味であれば、魔女の鬼神がそれにあたるだろう。王である魔なのであれば、闇の精霊王がいる」

そもそも魔という表現がこの世界では珍しい。魔物、魔術、魔力、魔女……という言葉こそあるが、一般的とは程遠い。

「外見を指して、って感じでしたよね？イエソドには『悪魔』なんて言葉もあるそうですから、何か『禍々しいもの』とか『こわいもの』を指すんじゃないでしょうか」

「魔女の魔に近い、という事かな」

超常のものを意味する言葉だ。だが司書が気になっているのは、魔王には精霊が見えるという点だった。魔術や魔力の魔は精霊を扱うという意味を含む。そちらの意に近いのではないかと感じていた。ただ、見えるというだけで王は付くまいとも思うが……。何分資料が少なすぎて詳細は見えてこない。

「まあ呼び名、あだ名が完全に真実を示すとは限らないしな」

結局の処、文献から得られる情報だけではすべてを知る事は出来ないのだ。

ホド域はごはんが美味しいとエイラは思った。全体的に少々塩気が強いものの旨味が活かされている。距離的に離れてはいるが隣国だけあって味の嗜好が似ているのかも知れない。魚や野菜が中心だが、どれも丁寧に調理されている。

「こんな山の中で、こんな良いものが食べられるとは思わなかった」

フェディットは笑顔で礼を伝えるが、店員の愛想はあまりよくない。不審に思われているのがひしひしと伝わってくる。

元々外国人を好まない地域性があるらしく、更には眼帯と角、こども二人と親ではなさそうな大人一人という組み合わせが怪しさを増しているようだ。フェディットもセルビアも気にした様子はない。エイラとしても、これこそ普通の反応だろうと寧ろ少し安心した。今まで誰も反応してくれなかった角がやはり異様なものだと認識出来る。うっかり馴染みかけていた自分に警戒を促してくれた。

「さてと」

「…あんなたち、」

会計を済ませて出立しようとする、渋々といった様子で店員のひとりが話しかけてきた。

「人か玄獣の類いか解らないが、余所者<sup>たびびと</sup>だろう。この時季この山は気が立っている。余計なことはするなよ」

「と言うと？」

山の気が立つというのも解らなければ、余計なことというのも解らない。

「山を刺激するな」

夏の祭で鎮めるまでの間、冬の眠りから覚めたばかりの有象無象たちはグズリやすい。山の動物たちもまた、こどもの巣立ちの時期で気が立っている。初夏のアッシャー山脈は決して安全な場所ではない。地を知らぬ余所者が立ち入って良いものではない。

「なるほど」

フェディットは少しだけ驚いた様子で話を聞き終えた。

自然崇拜、山岳信仰、神秘への畏怖。そういった類いの知識はあっても：実際に精霊や玄獣の存在を認めてはいても、どうにも自分には馴染みがない。神秘を守り抱く緑豊かな山の邦。神秘を暴き手放した砂の邦。正反対だと静かに思った。

「ご心配なく。我々は何かするつもりはなくてですね、ただ通り過ぎさせてもらうだけです」



「先生、今の話…」

「ん？」

店を離れて竜車へ戻ると、エイラが乗り込んだタイミングでセルビアはフェディットを引き留めた。

「昨日、警告に来た奴がいる。領域侵犯って言ってた。エイラの存在が山を刺激することになるのかも」

フェディットは唐突に言葉が通じなくなったかと思うほど、セルビアが何を言っているのか解らなかった。

「ドラゴンじゃなくて？」

「なんでかは解ないけど、赤竜も警告者も、エイラを気にしてたんだ。知ってるって感じだった」

「……………」

エイラはウオートバランサーから出たこともない筈だ。人間以外のものと面識があるとは思えない。裕福ではあったようだがあくまで一般市民のこどもが、玄獣たちに一方的に知られているというのも妙な話だ。

「とは言えやることは変わらない。なるべく早く山脈を抜ける。頼んだよ」

「まあそうだよね。一応報告ってことで」

立ち話するふたりを車内からエイラが小首を傾げて見ていた。それに声を掛けながら乗り込んでいくフェディットを見送って、セルビアは少しの間そのまま車内を眺めていた。

——君は、何者？

無意識に手が右目を押さえていた。それに気付き、自分が言えた義理でもないかと自嘲する。

「っよし！」

気持ちを切り替えるように勢いよく御者台に飛び乗った。

竜車はアッシャー山脈の西側を南へと進んでいく。しかし今までのようなスピードがない。結局今晚も山中で車内泊になりそうだ。

「やっぱり昨日無理させたから調子悪い？」

「そういう感じじゃなさそうだけど……」

午前中は問題なくいつもの調子で飛んでくれていた。日が傾くに連れ減速していったように思う。とはいえ流石のセルビアも竜と会話は出来はしない。どうしたの？と体を撫でも、小さく鳴いて鼻をすり寄せてくる竜の考えは見えてこない。少し翼を気にしているようにもみえるが、セルビアが診たところ異常らしい異常はなさそうだった。フェディットに助けを求める。「いやあ僕は人間専門だからね」と言いながらも診てはくれたが、やはり原因は解らなかった。

「戦闘機も此処までは来ないでしょうし、急がなくてもいいんじゃないですか？」

早く山を離れた方がいいと感じているのはセルビアだけで、フェディットにはイマイチ実感がないし、エイラは何も知らない。どうしたものかと一度竜から視線を外したセルビアは、

「エイラ、うさぎは大丈夫？」

「え？はい？」

突然謎の問いを発し、エイラも唐突な質問に驚きながらも返事を返した。うさぎは大丈夫だ。

「なら良いかな」

「なんだ、察しがいいなあ」

茂みを分けて現れたのは昨日の少年だった。

「この子が『警告者』？」

「うん」

呪術士の装いからしてこちらの管理人なのだろうか。と考えてから、フェディットは気が付いた。昨日の地点からだいぶ移動している。同じように飛竜でも使わなければ此処にいる筈がない。そして、並んで飛んだ飛竜は居なかった。

「うさぎ……」

「あんたも回転が早い」

ひとり全く意味が解らないエイラはただただキョトンとするばかりだ。少年と目が合って、慌てて視線を外した。

「おまえ、静かに通り過ぎるだけなら見逃してやったのに。他者の領域で力を奮うなよ」

「え？」

明らかに自分に向けられた言葉だとは解るが、一切覚えのない内容にエイラは戸惑う。フェ

ディットはエイラを庇うように少しだけ立ち位置を変えながら「どういふことかな？」と少年に問い掛けた。

「どうもこうも……」

呆れの混ざった視線をフェディットに向ける。

「あんだ、平気なのかソレ」

「？ え、どれ？」

キヨロキヨロと自分や周りを見改めるが、何を示しているのか解らない。

「はゝ呆れたゝそりやアイツも消えるつてもんだわ」

盛大に溜め息を吐いてから改めて向けられた視線は厳しさを増していた。

「あんだたちの国と違って、うちはまだ神秘が生きてんだ。無遠慮な振る舞いは見逃せない。

ホドを出るまで、力を封じさせてもらう。抗うなよ」

少年が杖を掲げると、エイラの角に文字様の紋が巻き付くように浮かび上がり、やがて沈着した。何が起きたか解らないエイラは首を傾げている。竜が身震いして、伸びのような仕種と共に一声鳴いた。

「さっさと出てけよ」

状況を把握できない三人にそれだけ言い残し、ホドの国家守護獣・オルデモイデは姿を消した。

「あれが国家守護獣……」

「凄いのと出逢っちゃったね」

「国のお役人さんですか？」

セルビアもフェディットも状況の意味こそ解らなかったが、それ以上に何も理解できていないエイラの質問に呆れ返る。

「ええと、まあそんなものかな」

「イエソドは守護獣いないの？」

「聞いたことないです」

守護獣は全ての国に一体ずついる筈だ。もう姿は見られなくとも、記録としては存在する。聖霊——つまり各国の初代国王と「国を守る」という契約を交わした玄獣。その存在を以てその領域は国と呼ばれる。ホドの場合は、大兎オルデモイデ。大半の国に於いて守護獣が記録だけの存在となりつつある中、この国の守護獣は未だ姿を保持している。

「……なんだか空気が変わったね」

ふと、フェディットは辺りを見回した。鬱蒼とした木々がもたらす重圧が薄れている。慣れない山林故そういうものかと思っていたが、先程のやり取りから察するに違ったのかも知れない。心なしか竜も先程までに比べのびのびしているように見える。

「肩が軽くなったみたいなのがするね」

セルビアも同意を示す中、エイラはひとり「そうですか？」と首を傾げた。

翌朝、竜はハイスピードで飛んでくれた。あれから度々気に掛けているがエイラにも不調はなさそうだ。角には変わらず紋様が浮かんでいる。

順調に距離を進み昼休みを取る。立ち寄った食事処は前回ほど無愛想ではなかったが、やはり少し警戒されているようだった。

「この調子なら夜までにはマルクトに入ると思う」

「結局彼は我々を助けに来てくれたのかな」

「早く出て行って言っていたしね。そうかも」

山菜や川魚に舌鼓を打ちつつホドの大兎に感謝した。漸く目的地であるマルクト域だ。その先は目的こそあれ宛のない放浪になる。

「長くなるかも知れない。何か手掛かりがあるといいね」

頷きを返しながら、エイラはそうかと目を瞬かせた。なんとなく、マルクトへ着いたらこの旅はおしまいだと思っていた。実際は着いてからがスタートだ。先日確認した地図ではマルクト域は広大だった。先生も長くなるかと言っている。

「……はやく、見付かるといいですね」

心にも無い事を言った。





## 17

山を抜け、海を渡る。少しだけイエソド域を横断しなくてはならなかったが、幸い何事もなく通り抜けられた。

ただただ果てしなく続く草原。月は明るく、夜でも周囲を確認できる。辺りに道は敷かれておらず、大きな集落もない。地形もなだらかで、何故此处に街が出来なかったか不思議で仕方がない。

その草原に降り立ち景色を見回した時、エイラは何処か「懐かしい」と感じた。ビルに囲まれて育ったエイラはこんな壮大な風景に覚えはない。街中の自然公園だって、小さな四角い芝生でしかない。懐かしさなど感じる要素はない筈なのに。思わず目が潤むほど、この景色は懐かしい。

「いや凄いいね。森の中にだって民家はちらほらあったのに、こんな平原に何もないっていうのは」

「草丈そこそこ高いから、朝になれば意外と何かあるかも知れないよ」

竜に周囲の安全を確認してもらい、小さなテントをふたつ建てる。草を敷いてしまつて安定は悪いが、雑魚寝はフェディットにはそろそろ耐えられなかった。

ゆつくりと低空飛行しながら集落を探す。民家でもいい。とにかく原住民と出会わなければ始まらない。フェディットとエイラも車窓の左右を覗き込み、何かないかと眺めている。

何処まで飛んでも草原が広がっている。竜車の落とす影、風に靡く背の高い草、初夏の陽射しに煌めく川。

「川の近くとか、集落があってもいいと思うんだけどね」

一応マルクト内でも人の集まる地域があるのは知っている。大樹の麓と大陸を繋ぐ大橋の周辺だ。西の外海側から回り込んだきた今回は大橋よりもまず世界樹を目指して飛んでいる。道中集落があれば寄りたいと目を凝らすのが、驚くほど何もない。

「でもなんだか、気持ちがいいですね」

エイラの呟きにフェディットはおやと視線を向けた。窓を覗いている為後ろ姿しか見えないが、恐らくその表情は微笑んでいるのだろう。

「――え？先生、何か言いましたか？」

「ん？いや？」

エイラはキョロキョロと辺りを見渡している。

「あ、また」

フェディットも耳を澄ますが、風と草の音くらいしか聞こえない。

「歌、みたいな……」

「セルビアくんが歌ってるのかな？」

天気もいいし風を切ってこの草原くさほらを往くのは気持ちがいいだろう。速度も控えている今、歌く  
らい溢れても不思議はない。

「こっち…って、どっち？」

耳を澄ませていたエイラがそう呟くと、竜が鳴いた。

「え!? ちょ!?! どうしたの?」

急に方角を変えた竜にセルビアが驚きの声をあげる。制御がきかない。竜の調教と操縦に長け  
たセルビアにとって、実務中の暴走は初めての経験だった。

「セルビアくん? 大丈夫!?!」

「え、や、よくわかんない!! 行きたいところがあるみたい!?!」

セルビアの強い制止を振り切って、竜は草原を突っ切った。

こっちだよ、こっちだよ

もうすこし、あとすこし

おかえりなさい、おかえりなさい

「何此処：集落跡？」

竜が降り立った場所は、人の集まっている場所ではなかった。かつては多くの人が居たのかも知れないが、その痕跡は朽ちて草に埋もれていた。それでも解らない程ではない。町、と呼んでいい程度のものであっただろうという事は。

「なんでこんな場所に」

セルビアの問いに、竜はじいっとエイラを見詰める事で応えた。つられてエイラに目を遣ると

「エイラ!? 大丈夫!？」

「えっ。どうしたんだい」

言葉も発さず、嗚咽もなく、ただ涙を流していた。

ふたりの呼び掛けにも応じない。呆然と目を見開いて泣いている。やがて、我に返ったように涙を拭い口を開いた。

「なんで、こんなに、どうして、私は……」

震える喉が音を出すのを、震える心が言葉を見付け出すのを、三人は辛抱強く待った。

「……『嬉しい』んでしょ」

聞こえる。帰還を喜ぶ声。おかえりなさい、おかえりなさい、おかえりなさい、おかえりな

さい。嫌悪すべき悪魔の声に違いない。私はこんな場所に覚えはない。なのにどうしても一言口にしたくて。

「た」

「いいえ。貴女の帰るべき場所は其処ではありませんよ」

声が出たと思ったら、草の合間から男の姿が浮かび上がってきた。立体映像だ。見れば地面には投影装置が備えられていた。フェディットは咄嗟に前の襲撃を思い出した。あれはこの男の差し金か。エイラは目を見開いてポカンとしている。

「司教さま……！」

気が付けば周囲を青色の衣を纏った武装集団に包囲されていた。

「これは……」

鬼神のように透けた男をエイラは司教と呼んだ。であれば今自分達を囲んでいる彼らは教会騎士だろう。身の危険を感じ、セルビアはじわりと後退る。いつでも竜に合図を出せるように整える。当たり前だが教会騎士たちも竜を一番警戒しているようだ。

「エイラさん、でしたね」

「は、はいっ」

と返してから、エイラはハッと左半身を隠すように身動いだ。それを見ても司教は目を細め優しい気な表情を浮かべている。

「我々は貴女を必要としています。一刻も早く帰国して下さい」

「は」

今度は、続けることが出来なかった。何故だか「はい」と言い切れない。

「容姿を気にしているのなら、大丈夫ですよ。誰も貴女を悪く言うことはありません」

「……」

とても考えられないが司教さまが仰るのならそうなんだろう。司教さまのお墨付きでこれが悪でないというのならそれは当然帰りたい。筈なのに。何かが断固拒否と訴える。

「失礼。イエソドの大司教さまが認められるということは、貴方はこの変化について深くご存じで？」

「……。こんな果てまで、我が市民のためにご尽力頂きありがとうございます。ここからは我が国の問題ですので、エイラさんの引き渡しと撤退をお願い致します」

口を挟んだフェディットに変わらぬ笑みで司教はそう返した。知っていると知っているも同義だが、公的には黙秘ということらしい。どうしたものかと息を吐く。折角こんな所まできたのだから手ぶらで帰るのだけは避けたい処だ。

「エイラ、帰るの？」

セルビアの問い掛けにもエイラは答えられない。帰りたい。けれど何かが…恐らくはこの地に涙したその何かが嫌だと強く訴えてくる。

返事が出来ずにいると、司教は痛ましそうにエイラに語りかけた。

「可哀想に。それに共鳴してしまっているんですね。では少し話をしましょうか。そのおぞましい、片角について」

「貴女は『無形の悪魔』という話をご存じでしょうか」

「はい」

当然だと付け加えたい程知っている。聖霊の逸話の中でも特に有名な話だ。何度も映画化されたり、多くの創作物語のモチーフになっていたりする。形の無い霧のような悪魔を、我らが聖霊は打ち倒した。苦戦を強いられたものの最後には気持ちよく両断してハッピーエンドだ。

「でしたら説明は簡単です。貴女にはその悪魔が憑いています」

「え？」

エイラの左手が、知らず角に伸びる。頭が真っ白になる。

——あれは聖霊により滅ぼされたのでは？ いや、それよりも。司教さまのお墨付きで悪魔と断じられてしまった。ならば「帰国せよ」とは。処断するために——？

「ああいえ、命を奪ったりはしませんよ。貴女には生きていて頂かないと困るのは我々です。話を続けましょう」

角に触れ、思考できない状態のまま、エイラはただ頷きで返した。

「建国の折り、国の礎に捧げるべき存在が求められました。人ならざる寿命をもつエネルギー体。即ち、悪魔です。それもとびきり強大な。しかし、勿論我らが聖霊の治める地には悪魔な



どおりませんでした。強いものも、弱いものも。そこで聖霊は悪魔狩りに出掛けたのです」

説法用に整えられた話には載っていない、秘された歴史の話だ。奇しくも他国よりも真実に近い形で残されているそれは、国家守護獣の役割と成り立ちを語っている。イエソドの聖霊は守護獣が何の為に必要とされたのか端的に理解していた。そして彼女はある意味誠実だった。ケセドの聖霊のように甘言を用いるでもなく、ホドの聖霊のように絆で縛るでもなく。コクマの聖霊のように契約から逃す術を持っていた訳でもない彼女は、領域外で見つけ出した力ある玄獣に戦いを挑んだ。あなたが負けければその身を頂くと、彼女の知る範囲の事情を話して。

世に十の国あれど、力で下された守護獣は他に居まい。一方的な宣告で無理矢理に従わされ知らぬ土地で生贄にされた。その無念は如何程か。そしてこれを聞いてしまった我々は生きて返しては貰えないのではないか、とフェディットは表情をひきつらせた。

「さて。事の重大さはお分かりでしょうか」

「ええと……私には他国という処の国家守護じゅうというものに該当する悪魔が憑いていて、国家安寧のために必要とされている……」

「上々です。貴女が居なくては国が国として成り行きません。お戻りいただけますね？」

エイラはちらとふたりを見遣った。

「ああ、貴女が戻ればおふたりは無事故郷までお返ししますよ。もう二度とお会いすることは出来ませんが」

なるほど。永久的な入国禁止。それで今話した機密は市民に伝わることはない、と。徹底して悪魔を排除してきた国が、一体の悪魔の犠牲の上に成り立っているなど市民には聞かせられない。

「私：何をすればいいのでしょうか。そんな大役、ふさわしい気がしません。憑いているという悪魔だけ剥がして頂くことは？」

「心配せずとも、貴女はただ生きていてくれれば良いのです。その悪魔は貴女を選んだ。貴女の心臓が定められた鼓動を打ち終わるまで、それは離れることはありません」

「……」

「貴女が敬虔な信徒であることは、それに選ばれた時点で充分わかっています。さあ国に戻ってください」

子を為すつもりがなかった聖霊は守護獣との代理契約の基準を血ではなく信仰とした。志を同じくする者こそ血より深い繋がりがあると。代理契約者として憑かれることは名誉である。そう説かれれば、最早拒む理由など何処にもない。

「…その悪魔、名前は？」

唐突に口を挟んだのはセルビアだった。

「それを知っています」

「名前ひとつ知ったからって、何か出来ると思う？」

囲まれ武器を突き付けられた身で豪胆なものだと感心するが、フェディットは気が気ではない。ここでエイラが帰ると言えば丸く収まる：収めてくれると言っているのに、何をしでかす気しているのか。

エイラは自分の答えを保留して司教の返答を待っている。司教は溜め息を吐くように一度俯いて、首を振りながらそれに答えた。

「アイーアツブス。そう伝えられています」

「そっか」

頷いて、セルビアはエイラに向き直る。

「アイーアツブス。君は戻りたくないんだろ」

そう呼び掛けられ、エイラはきょとんとセルビアを見返した。自分の中に何かが居る気は：しなくはないが、それが応える気配はない。

「それにはもう正常に思考する機能は残っていないと思いますよ」

守護獣に選ばれる程の玄獣だ。他国の守護獣から察するに、人語を解し人に化け意志疎通が出来るだけの力があったのだろう。だが今は信心深い人間に寄生しないと存在すら保てない弱々しい存在だ。残っているのは、ずっと抱き続けてきた強い感情だけ。

「それでも、必要なの？」

「それでも、必要です」

どんなに弱体化していようが希薄な存在と成り果てようが、契約は未だ生きている。

「貴殿方の国だって、似たようなものでしょう」

「え、と」

思わずフェディットを振り返る。

「……そうでしょうね」

自国の守護獣について知らないということが既に物語っている。勿論姿形や名前は伝え聞いているが、その実在を感じてはいない。伝説のもの、いてもいなくても変わりはない物語フィクションの存在。その程度の認識だ。オルデモイデに出逢ったことで多少現実味を帯びたものの、それでもそうそう実感はできない。あの時は聞き流したが、オルデモイデが言っていた『あいつ』というのは恐らくはケセドの守護獣のことだろう。ケセドの民は神秘を認識できず守護獣すら力を失って消えかけている、と。

「守護獣が消えると国はどうなるのか。それを真っ先に世界に示してくれるのは貴殿方の国だと思っています。我々はそれを見てから考えましょう。その悪魔を、解放する可否か」

## 19

「……」

認識が違いすぎて、どうにも巧く纏められない。ケセドに限らず殆どの人間は守護獣の真の存在意義など知りはない。各国の聖霊や当の守護獣ですら半数以上が知らない事だ。居なくなったら国が成り行かないなどと言われても、想像も出来ないし到底信じられない。フェディットにしてみれば守護獣の実在が既にギリギリだ。比較的神秘に近い処で生きているセルビアがアイーアツブスに同情的なのは解らないでもないが、正直早く解放されたい。武器を突き付けられずに済む神秘の少ない日常に戻りたい。その為なら玄獣に寄生されたというレアな患者を手放すのも致し方ない。

「実際、ケセドの守護獣は数年前に一度消失の憂き目を見ていますね。ああ、ご存知ない？」  
知るわけがない。実在さえ信じていなかったのだから。

「さてお喋りはもういいでしょう。他所の国の事に首を突っ込む前に、自国の心配でもなさい」  
返す言葉もなくフェディットは息を吐いた。

「エイラくん」

「先生…セルビアさんも…お世話になりました」

ペコリと頭を下げるエイラをふたりは各々それぞれに複雑な表情で眺めるしかなかった。何はともあれ、

エイラは帰れないと思っていた故郷に戻るのだ。しかも重大な位置に着いた。アイーアツプスには気の毒だが、彼も元に戻るだけだ。そもそも彼が外に出てしまったのが事故だ。想定されないイレギュラーだった。偶々その場に、本来入国出来る筈のない、それを為してしまう魔術師がいた。奇跡のようなイレギュラー。一目でも再びこの地を見ただけ僥幸だ。

最初にそれに気付いたのは、竜。次にエイラとセルビアだった。  
ゴウツ、と風が不吉に吹き抜ける。

やだ やだやだ

だめ だめだめだめ

せつかく帰ってきたのに 帰ってきたのに  
ぼくらのおうさまを 連れていかないで!!

「なんだ：？」

紫色の靄が沸く。辺り一面に霧のように薄く。或いは一所に煙ひんたけのように濃く。

「ひっ」「うわ：っ！」

三人を取り囲んでいた騎士たちから悲鳴が漏れる。しかし、紫の霧は今や濃く立ち込め、その

姿は視認できない。

「これは……」

おうさま、おうさま！

いかないで いかないで

どうしよう どうすれば

にんげんが ああ そうか

にんげんが にんげんが

いなくなればいい！！

最後の叫びはその場の全員に聞こえた。歌のようだったその声は度々エイラに聞こえていたあの声だ。たくさんの幼いこどもが同時に喋っているようなバラバラの音。それがピタリとひとつになった。

エイラは青褪める。これもまた悪魔の声だった。よくわからない声が聞こえるなんて、我ながら何故不気味に思わなかったのだろう。今明確に人間の排斥を意識したこの声に、どう行動すればいいのだろう。

「司教さま……司教さま？」

電波妨害。紫の霧は通信を遮断する。音も映像も繋がらない。あちこちから騎士たちの呻き声が聞こえてくる。霧が人体を害し始めているのは明らかだ。竜が翼で強く風を起こしても紫の霧はそよぎもしない。近くに立つ筈のふたりすら影になり、慌てて伸ばした腕を誰かに掴まれた。

「っ!？」

「エイラ、逃げよう!」

セルビアが手を引く。

「駄目だよセルビアくん」

セルビアの腕をフェディットが掴んだ。

「このままだと皆死んじゃうよ!」

「ここでエイラくんを連れて逃げたら、我々も終わりだ!」

恐らくこの霧はエイラには害がない。霧が立ち込め始めた時から衣服で口鼻を覆いなるべく吸い込まないようにしていたフェディットにもまだ害はないようだ。今の内に離れるべきだ。

「エイラを置いていくっていうの?」

「……そうだ」

もしも騎士たちが全滅していても、すぐに第二陣が迎えに来るだろう。フェディットとセルビ



アがその場に居合わせれば恐らく殺されてしまう。エイラを連れていけば間違いなく国際指名手配犯になってしまう。ふたりだけで逃げるのが得策だ。

「エイラくんはどう転んでも助かるが、我々は今逃げないと死ぬ。例えば君がここに残れば、僕は移動手段も荷物もなくなる」

「……それは……」

「セルビアさん、行ってください。私を置いて。早くしないと、霧が」

実際フェディットはもう大分辛そうだ。エイラは普通に呼吸をしているが、身体に異常は感じられない。セルビアは平気そうにして見えるがいつまで保つか解らない。

エイラは考える。よく解らないし恐いし少し悲しいけれど、司教さまのお墨付きで悪魔と断じられた身だ。恐らく、多分、大丈夫。

『おうさまを連れていけないで』

彼らはそう嘆いていたのだから、着いていたらふたりがより敵視されてしまうかもしれない。濃霧は既に煙のように。掴まれた手すら見えない程に濃くなっている。

「お願い、早く！」

エイラは掴まれた腕を振りほどいて、闇雲に突き飛ばす。

「…エイラ」

「私は国に帰ります。『私』は帰りたいの！お父様とお母様にまた会いたい…！」

——だから大丈夫。来てくれる筈のお迎えを待つ。霧が晴れたら、司教さまと通信が繋がるかもしれない。そしてたら事情を説明して、ふたりのことも見逃して貰って、

だめだめだめだめだめ!!

そんなの いやだ!

「…え…」

エイラは目を見開く。何かゾロリと這い上がり…いや、何かにズブリと沈み込み——エイラの視界は一面の紫から一面の黒に変わった。

ふたりが霧から抜け出せたのかどうかは、エイラには解らない。



## 20 幕間

或いは、強き獣の記憶。

白銀の鎧を纏った有翼種の女。それは突然やって来て、一方的に宣戦布告をしてきた。よく解らない内にこどもたちが風呂払われ、次の瞬間には応戦していた。形のない我らを焼き尽くす熱量。狂った瞳のバーサーカー。高々人の身で強き獣を圧倒する。なんだこいつは。なんだ。困惑しながらも追い返す。より高揚した様子ながら撤退した筈が、数日待たず再度現れた。何度もやってきて、何度も追い返した。段々手強さが増している気がする。そろそろ確実に仕留めておかなくては。

知らぬ間にこの地に居た。故郷に帰りたいと願ったが、こどもたちは私を迎え入れてくれた。施したり施されたりしながら長い時を過ごす内にこの地もまた私の故郷になった。愛しいこどもたち。私を王と呼んで慕ってくれた。無形の私は彼らを巧く真似ることが出来なかったので、時折その身体を借りることもあった。

実は元の故郷の事はハッキリと覚えていない。どんな場所であつただろう。ひよつとしたら私は某かのエラーでこの世に構築された再現体なのかも知れない。それでも還りたい気持ちはある。だがこの地も最早私の故郷。であれば、侵略者は許さない。我が子の仇を取らねばならない。

或いは、贄の記憶。

相討ち覚悟で取り憑こうとした悪魔を、我らがリーダーは私に封じた。リーダーの身代わりになれたのだから名誉極まりないことだ。美しく誰より強い我らがリーダーに私は心底心酔していた。

そうして私は樹の根に生け贄として捧げられ、我らの領域は国となった。仕組みは一切解らないが、私も私の中の悪魔も死にはしなかった。少し身体が重たくなった気はしたもの、特にこれといった契約の代償を感じることはなかった。

そのまま数十年過ぎた。国は発展を続け、技術は刻々と進歩し、指導者は果て、我らは聖霊として彼女を祀った。彼女の意志と教えを伝え続けるのだ。

それから数十年過ぎた。知った顔は居なくなつた。それでも私はあの時から変わらぬ姿のまま人前に出ることなく、センターの奥でこっそりと生きていた。時折内側から聞こえる声によれば、この心臓が機能を停止するまで、私は死ぬことは出来ないらしい。

そうして数十年過ぎた。なんとなく感じる。私の最期は近付いている。そうしたら、どうなるのだろう。この悪魔は解き放たれてしまうのだろうか？私には解らない。

或いは、別の贄の記憶。

ある日突然、頭に一本、角が生えた。ぐるっと捻れた禍々しい角。すぐに悪魔として捕らえられ、首を刎ねられた。らしい。何せ実感がない。私の首は今も胴と繋がっているのだから。

それから色々なことをされたけれど、命に関わるような大きな傷では血の代わりに角と同じ質感の何かが出てきてすぐに傷を塞いでしまう。毒の類いも効かないようで、センターから迎えるまで、とてもとても痛い目にあわされ続けた。

心は閉じかかっていたけれど、司教さまはとても優しく接して下さって。許された行動範囲はとても狭かったけれど、衣食住に不自由はなく。外に出ることさえ望まなければ、どんなわがままだって通った。けれど。司教さまも古い、亡くなり、代替わりし、また古い。変化のない世界で、成長しない私は。結局心を閉ざし、退屈にまみれて心停止を待ただけだった。

或いは、また別の贅の記憶。

裕福な家の一人娘。愛されて育った信心深い少女。偶然が重なり、悪魔を宿したまま国外へ出てしまったイレギュラー。

竜に揺られて旅をした。穏和な医師と不躰な御者。彼らは――

どうやら、この記憶は途中までしかないようだ。そうだ。これが直近の記憶。今の私。であれば、これを頼りに再び構成しよう。

散り散りになった私を掻き集める。霧散した情報を繋ぎ合わせる。消えそうな意識を、強く保

つ。  
私の望みは、  
還ることなのだから。

## 21 後編

何も見えないまま、フェディットはセルビアの手を掴んで引かれるままに歩を進める。

「先生、こっち！」

セルビアはこの濃霧の中でも平然と竜の元まで辿り着いた。

「げほ、ごほ！」

大分吸い込んでしまったのか、フェディットは蹲って咳き込んでいる。換気の悪い車内に入るのも良くないかも知れないが、セルビアにはこの大男を担ぐことは出来ない。たじろぐセルビアだったが、竜が動いた。フェディットを啞え、早く乗れと急かす。

「ありがとう！」

緊急発進。羽ばたき一つで紫の濃霧を眼下へ押し遣ると、竜はふたりを安全な場所まで運んだ。

「げほっ、げほ、——はあ、はあ。助…かった……」

紫霧に侵されていない清涼な空気を取り込み、体内の空気を入れ替える。後に残る毒性は無さそうだ。呼吸の度に体が楽になっていく。

「先生大丈夫？」

「うーん、なんとか」



落ち着いてくると、身体についた竜の涎が気になってくる。それで助かったのだから文句を言うつもりはないが、とにかく臭いので洗い流したい。幸い竜は川辺へ運んでくれたので、もう少し落ち着いたら沐浴をすることにした。

「エイラ大丈夫かなあ」

「……………そうだね」

沐浴後の濡れた髪を乾かしながらそれだけを返す。彼女にとっても悪くない選択だった筈だ。だが、言い知れぬ後味の悪さが胸に残る。

「……………セルビアくんは、あの霧が平気そうだったね？」

誤魔化すように話題を逸らした。

「僕だけじゃないよ」

そう言っただけセルビアは竜に目を遣った。なるほど確かにとも思うが、竜と人を比べて良いものか悩む。

「あれは人間に対する呪詛みたいなものだったから、竜には効かなかったんじゃないかな」

「ん？」

「僕、もう半分竜のようなものみたい」

竜は砂漠で赤子を拾った。人間に特に思い入れも好意もなかったが、それがただ必死に生きようと喚んでいるのを、なんとなく放って置けなかった。

ミルクの代わりに玄力を混ぜ込んだ水を飲ませ、暑さや乾燥から守るために玄力を纏わせ、氣付いたらそのこどもは少し『人間』から離れていた。

竜は慌てて、まず容を調えた。こどもが溜め込んでしまった力を奪い、人間の群れに放り込んだ。おとうさん、と泣いて戻ってきてしまう我が子に、何度も何度も言い聞かせた。

『一緒に居ては人間から外れてしまう。おまえがどちら側で生きるかの選択は、おまえが自分でしなくてはならない。幼心で偏った選択をしてはならない。自分の命は自分の為に使いなさい』

幼子は全く意味が解らなかったけれど、何度も何度も言われる内に、諦めなくてはならないらしいということだけは分かってきた。

『もう、おとうさんにあえないの？』

竜は優しく頭かぶりを振った。

『それでも、私はおまえの父であろう。助けを求める時は駆け付けよう。ただその度におまえはこちら側に寄ってしまう。頻繁に呼んではいけないよ。本当の本当にどうしようもない時、

命の危機にある時、そんな時だけ呼びなさい。何処に居たって駆け付けるから』

「あの時助けてくれた竜、僕の父さんなんだ」

「戦闘機に追われた時の？……父さん？」

フェディットは頭が痛そうだ。

「……母親は？」

「知らない」

旅の仲間がふたりとも人外であった衝撃に眩暈を覚えながら、フェディットは濃い目に入れた炒豆茶に口をつけた。一度落ち着きたい。

「僕は人間だったんだけど、父さんに力を借りる度に竜に近付いちゃうんだって」

助けを求めたのはこれまでに二度。一度目は片方の瞳の色が金に変わった。二度目の変化はまだ解っていない。だが、あの時助けを求めているなければあの霧もまだ効いたかも知れない。

「次は鱗でも生えてくるかも知れないねー」

軽い調子で口にしてから、

「……そしたらエイラに嫌われちゃうなあ」

少し俯いた。

「どうだろうね」

もう会うこともないだろうが、敢えて口にするのもでもない。

「それで先生、どうするの？ 帰る？」

「そうだなあ。ターミナル登録だけ済ませちゃおうか。そしたら一旦帰ろう」

「そうだね」

ターミナルさえ使えればまた来られる。この長旅も、無駄足だったということはない。

「いやあ、ハイテクだった」

「凄かったね。話には聞いてたけど」

草むらにポツンとある四角いだけの建物。一見入り口もないその遺跡は、戸の開閉もなしにすんなりと旅人を招き入れる。まるでイエソドにあるような機械を操作して存在登録を済ませ遺跡を後にしようとする、ターミナルは目映い光に包まれた。誰かが転送されてきたらしい。やがて光も収まると、そこにはひとり、呆とした様子で立ち尽くす人物が居た。

「……………ここ、は」

転送直後で朦朧状態なのか、ゆっくりと手を持ち上げ、目の前で閉じたり開いたりを繰り返している。

「先生？」

——美人だ。

目を奪われたまま動かないフェディットの袖をセルビアが軽く引く。

「あ、ああ」

行こうか、と無理矢理に顔を背けて一歩踏み出すと、

「あの」

涼やかな声に、フェディットの足は再び止まった。

「いきなりすみません。貴方たち、アイーアツブスをご存知でしょうか」

紅潮から、蒼白へ。

背を冷や汗が伝っていった。

色素の薄い豊かな髪はゆったりと波打ち、大きく動かせばふわりとユリに似た香りが広がった。よくよく見れば身一つ。荷物も持たずにこの辺境まで来てアイーアツブスのことを訊くなら、センターの人間なのだろう。フェディットは、我々の追討ではあるまいかと警戒すると同時にエイラの迎えかも知れないとも思い至る。であれば、しらばつくれることも出来ない。しかし迎えであれば荷物くらいあるだろう。

「貴殿方がターミナルを起動したことで私は此処に呼ばれたようなので、ご存知かと思うのですが」

竜車で直帰せずここに立ち寄ることを読まれていたのだろうか。他国域のターミナルにまで監視が付けられるとは恐れ入る。ともあれ、センターの人間で間違いなさそうだ。

「エイラの迎え？」

「エイラ？…現在の憑代の名前ですか？であれば、そうですね。その方にお会いしたいです」地図を出して別れた場所を示そうとすると、彼は眉を寄せた。

「大変お手数ですが、案内して貰えないでしょうか。私、その。地図を読むのが少し苦手で」

遺跡から出ると、彼は竜を見て短く悲鳴を上げた。

「ど、竜での移動ですか」

そのたじろぎ様にやはりイエソドの人間だなと感じるも、エイラの時ほど嫌悪や憎悪を感じない。ちよつと苦手、少し恐い、そんな程度に見受けられる。

「我々の移動手段はこれだけでして」

乗れないと言うなら案内は出来ない、と言外に匂わせる間もなく、彼は情けない困り笑顔を浮かべ「よろしくおねがいします」と竜車に乗り込んだ。

「ふわ……！！ 北の方には竜に乗る者も居ましたが、私はこうして荷として運ばれるのも初めてです」

口を開いたまま車窓を眺める様は幼子のように微笑ましい。このイエソドの使者は、凜とした佇まいに似合わず気さくなようだ。が、フェディットは雑談を返す気にもなれず当たり障りなく短い相槌を打つのみに留めていた。

「もうすぐ着くよ」

セルビアの声に内心ホツとし、ここに来て初めて質問を投げ掛ける。

「エイラくんを回収後は、どのように？」

「国に戻して、再契約ですね。契約が切れてしまうなんてこの八百年で初の事例なのでどうし

たものか悩ましいのですが……アイーアツプスが死んだわけでもないのですから、どうにかなるでしょう」

「契約が……切れた？」

フェディット達が司教と話していた時はまだ切れてはいなかった筈だ。そのような話し振りだった。この短期間で一体何が起ったのか。

「おそらく、アイーアツプスの構成に変化があったのでしょう。あれは同種と融合して変革を繰り返す。ですから隔離してあったというのに……」

紫の霧だ。エイラには無害だろうと踏んで置いてきた決断に翳りが差す。

「……アイーアツプスの変化によって、憑代に影響は……」

「解りません。何せ前例がありませんので」

「……」

着いたよーと声がして、竜はゆっくりと着陸した。

「あら、此処は」

エイラと別れた辺りへ降り立つ。イエソドの使者は周囲を見渡して、眉を下げた。

「そうですか。減びていたのですね」

一方フェディットとセルビアは、周囲を見渡して眉を顰めていた。



エイラの姿はない。紫の霧の気配も、教会騎士たちの死体も、何もない。騎士たちは死んではおらずエイラとともに移動したのだろうか。

「誰もおりませんね」

「……ええ」

近寄って声を掛けてきた使者にフェディットが短く返す。セルビアは草むらにしゃがみこむと何かを拾い上げた。司教が使っていた、姿を映し出す通信機だ。ひび割れてしまっているが、この場所に間違いないことを示している。

「移動をしたのかも知れません。確かに我々とは此処で別れたんですが」

セルビアが上空から見た限り近くに人影はなかった。とはいえイエソドの技術は計り知れない。戦闘機の例もある。だが、新たに送られてきた使者との連携がここまでなっていないのはあの国の性質から見て不自然だ。

「なるほど」

使者は天を仰いでポツリと洩らした。

「この地から『再開』とは、中々物語적じゃないですか」

——ただか煙の分際で。

「え？」

フェディットの脳は低く吐き捨てられたその言葉の解説を拒否した。ただただにつこりと笑む

その顔を美しいと思う。

「おふたりとも、お手伝い頂けますか？ 報酬は免罪です」

「めんざい」

ふわりとユリの香りが広がる。使者は優雅に礼を取っていた。

「名乗り遅れました。私、イエソドの守護聖霊：ガフと申します」

「……はい？」

何処に隠し持っていたのか。礼から流れるような動作で気付いたら首筋に細い白銀の剣を突き付けられていた。フェディットは恐る恐る両手を上げて問い返した。

「不思議ですね。守護獣<sup>アイアツプス</sup>は認めるのに、何故聖霊<sup>わたくし</sup>は信じられないのですか？」

当たり前だ。聖霊は初代国王。歴史上の人物、過去の偉人だ。故人だ。目の前に現れてハイソうですかとはならない。

「そうですよ。故人です。全くいい迷惑です。安らかに眠らせるべきです」  
何に向かつてか憤慨している。

「とは言え国の危機なので、契約に従いこうして叩き起こされた訳です。気の毒なので従順に協力してください」

信じたくもないし信じられもしないが、仮に目の前の聖靈<sup>ガッ</sup>を名乗る者が本物だとして、全つくイメーজと違う。エイラだって信じなかっただろう。いや、黙っていればその凜とした佇まいも美しい顔もそれらしいのだが、こう頬を膨らませては仕方がない。

「偶然とは言え守護獣を連れ出した挙げ句こんな場所にまで連れてきた。結果アイーアツプスは契約を逃れようとしている。それは看過できない重罪です」

何故かフェディットばかりが怒られている気がする。セルビアもフェディットの隣で神妙にしてはいるが、ガフはあまりそちらを見ない。

「そ、れ、を。私を手伝えば不問にしようと言うのです。伏して喜び手を貸すものでしょう。：聞いていますか？」

「はあ」

気の抜けた返事しか出来ない。

「まあ協力するのは各かではないですが、：聖靈と言うならば我らの助力など不要では？若しくは、自国の者に助けを求めた方が：」

「出来ません」

キツパリと言い放ち、ガフはそっぽを向いた。

「……何だか私、凄く信奉していました。……なんて、………せん」  
「は？」

歯切れの良かった物言いが急に鳴りを潜め、もごもごと口の中で眩かれた言葉は届かない。もう一度聞き返すと、キッ！と顔を真っ赤にしてフェディットを睨み付け、

「地図も読めないし地理が全くダメな方向音痴だなんて知られたくありません!!」

「それは……それは」

自称聖霊は、耳をつんざく音量でそうカミングアウトした。

気高く清廉な百合の乙女。そう伝わるイエソドの聖霊を自称する人物は今、竜車の中でごろごろんと転がっている。

「貴殿方はマルジュから。なるほど、頭が固いのも納得ですね。男か女か判らない人喰と玄獣を侍らせた、あの変態の治めた国の人間ですか」

ケセドの聖霊ツアドキは医学の祖として伝わっている。人喰種ツエク・マーと契つたとされてもいるが、ガフの言うような風評は聞いたことがない。セルビアはどうだか解らないがフェディットはガフが聖霊だとは信じていないので、彼の言うことも話し半分に聞き流している。

「それで、我々はエイラくんの搜索をすればいいのかな？」

「あら？ 急にフレンドリーですね。ではこちらも。そうだ。アレの行き先には幾つか心当たりがある。言つた通り私は地理がサッパリなので誘導を頼みたい」

自分から丁寧語を止めておいて、フェディットはガフの口調に目を開いた。全然フレンドリーではない。寧ろフレンドリーから遠退いている。

「心当たりって？」

気にせずセルビアが問うと、ガフはあからさまに視線を彷徨わせ、恐る恐るといった態度でセルビアを見た。

「…えっと、はい。その…あなた、なんですか？」

「えっ？」

セルビアが固まる。なんで丁寧語なの？という疑問も浮かんだがそれどころではない。

「なんですかって…なに？」

疚しいところもあるが、それがなくてもダメージが入る言葉だと思う。いや、セルビアであれば疚しいところさえなければ気にしなかったかも知れない。

「竜種でもない、玄獣でもない、でも人間でもないでしょう。見たことのない生き物です。今の世では当たり前前に居るものなのでしょうか」

「それって、見て判るの？」

オルデモイデに続きガフにまで気付かれたのなら、何処かに人間ではない特徴が出ているのだろう。セルビアは自分の身体を見回すが、外見的にはまだまだ人間で通ると思う。それこそ角も生えていないし、鱗もない。

ガフはサツと首を回してフェディットを見た。

「解らないのか？」

「判らないねえ」

外見以外にもこれといって人外の特徴は感じられない。その心の丈夫さは人間味を疑うこともあるが、一目見て見抜けるものでもないだろう。

「まあそこまで隠してないからいいんだけど……だいぶ珍しいと思うよ。僕、半分竜なんだって」  
仔細を聞いてガフは頷いた。

「なるほど。竜の力を浴びすぎて竜化しかけているのですね」

「あ、そういうことなんだ」

当の本人もよく解ってなかったらしい。

「さて。ここらが君の言う心当たりの地だと思うけどどうだい」

降り立ったのは川の畔。『水果と呼ばれる植物の生える、水に近い場所』がリクエストだ。該当する場所は幾つかありそうだが、取り敢えず近場から順に巡る事にする。

「水果ってこの白い花の木？」

今は花期らしく実は付いていない。白い、糸を集めたような花が木の幹から直接咲いている。

「これね、実になると結構気持ち悪い形状なんだ。身体にはいいんだけどね」

2、3センチ程度の黒い実になるのだが、枝先ではなく幹から直接成るため些か見映えが悪い。水辺を好み乾燥に弱い為ケセドでは見られない植物だ。

「この木が好きなの？」

「どうでしょう。この木と好みが合う、のではないでしょうか」

「そういうこと」

セルビアには丁寧語のままだ。何故丁寧語なのか問えば、一言「ムリです」と返された。ならば仕方がないとセルビアも受け入れた。

「でもそれって、アイーアツプスの好みだよね」

フェディットがエイラのことも考えた方が良いのではと進言する。

「私は依代のことは知らないので考慮出来ない。何か思い当たる場所があるなら行ってみてくれ」

思い当たる場所……と言われても、ふたりとも結局、エイラのことはよく解らないままだった。ただ。

「帰りたい、と言っていたね。最後にも」

「うん。ずっとそうだったんだと思う」

アイーアツプスと同じ望み。だが、目標が正反対だ。意識も残っていなかったアイーアツプスが今や意思を通せる程力を取り戻している……とガフは読んでいるようだが、果たしてどのようなだろうか。

「依代の意思の方が強いのなら、帰路も徒歩だろう。発見出来ている筈だ」

草丈の高さに隠れて見逃した可能性も否定はできないが、凡そガフの発言には説得力があった。

「……………エイラ、大丈夫かなあ……」



「見付けられれば、取り返せますよ」

慰めのように掛けられた言葉に反して、ガフの表情には慈悲の一欠片も感じられなかった。

川沿いの草地にテントを張る。今日はもう陽も落ちてきた。

適当に車内の非常食を漁っていると、ガフが川で魚を捕ってきてくれた。釣具などはないので素手で捕まえたのだろう。そろそろ非常食も減ってきているので助かった。火を起こそうとすると、やはりガフが一瞬で起こしてくれた。大変に便利だ。

「魔術師みたいだね」

「魔術師……ああ。あれは私たちを真似たものだからな」

その表情から察するにガフは魔術師という存在を好ましく思っていないようだ。イエソドでは邪教扱いされているから当然かも知れないが、であれば、ガフのその力は何なのか。

（まさか、本当に有翼種ってことは……。いや、聖霊は有り得ないにしても、有翼種だというのはあるかも知れない、か）

聖霊は確実に故人だが、有翼種は滅びたとされる種族のことだ。先祖返りや生き残りが居てもいい。それこそ教団に「ガフ」の名を与えられて特殊な扱いを受けていても不思議がない。フェディットはやけに納得がいつて、ガフのことを少し信じられるようになった気がした。

因みに夜。エイラと違い大人な彼は三人での雑魚寝を嫌がった為、竜車にフエディットとセルビア、テントにガフが寝ることになった。



明け方。

川辺に薄紫に柵引く靄は、朝霧ではない。次第に一处に集まり、濃くなり、人の形を成す。そして現れたのは左側頭部から捻れた角を生やす少女だった。

「おはよう。早いなだな」

「…そちらこそ」

まだ少し覚醒しきらない頭でフェディットはガフに言葉を返した。ガフは既にテントも畳んで、朝の支度を終えていた。

「湯を沸かしてある。使って良いぞ」

「ありがとう」

顔を洗ってから、炒豆茶を淹れる。湯の札にとガフの分も用意した。ガフは受け取ったカップを覗き込んで複雑な表情を作ってみせた。

「…独特な匂いだ」

「身体に良いよ。飲んでみるといい」

不審気に鼻を動かしながら恐る恐る口を付ける。

「香ばしくて悪くないでしょう」

「……まあ、飲めなくは、ない」

「その内病み付きになる」

ガフはまた少し眉を顰めた。成分的には依存性はない。健全なお茶だ。

「明け方、奴が出た」

「ん？」

一息吐いてから吐き捨てるように言ったガフにフェディットは目だけを向けた。

「気配を察して追ったんだが、逃げられてしまった」

そうガフは忌々しそうに顔を顰めた。

「それは……エイラくん？」

「どうだろうな。少女の姿もとっていたし、紫煙にも変じた」

フェディットは押し黙る。一体彼の身に何が起きているのか、想像が働かない。

「だが欠片を得た。これで追える」

ガフが掲げて見せたのは小さな瓶。中にはうっすらと紫の靄が片寄っていた。

「それは？」

「奴の一部だ。これは本体に戻ろうとしている」

つまり、瓶内の靄の濃い方向へ進めば本体に会えるという寸法だ。

「知識を預かっていて良かった。異邦人とは言え、流石は彼の子孫だな」

フェディットにはその言葉の意味はさっぱり解らなかったが、深く訊こうとも思えなかった。

「居た」

小瓶を片手に竜を駆っていたセルビアは、遙か遠くに人陰を認めエイラと断定した。同時に車内のガフもアイーアツプスの気配を感知し窓から身を乗り出す。

距離はかなりあるが遮蔽物もない平原だ。向こうも此方に気付き逃げようとし、——竜車を見て、動きを止めた。そして音速で飛ぶ竜はすぐにその距離をゼロにした。

「エイラ！大丈夫？」

セルビアが声を掛けながら近くに降り立つ。エイラに逃げる気配はなく、「セルビアさん……」と小さく洩らした。見た限りエイラに異常はない。格好も別れた時のままだ。

「エイラくん、お迎えだよ。あの場で待っているかと思っただのに、随分と移動したねえ」

「……先生も……無事で、良かったです」

ほっとした様子のエイラにフェディットの胸は少し痛む。

「君の決断のお陰だ」

「ありがとう」も「すまない」も違う気がして続けられない。

「いえ…」

エイラはそう呟くと俯いたまま上目遣いにフェディットの背後を盗み見た。見たことがない女性が立っている。否。よく知った、悪魔がそこに居る。

「今朝は言葉も交わせませんでした。久し振りですねアイーアツプス」

「どうして貴女が…」

自らを抱き締めるようにしてエイラは怯えを示している。ソレが何か解っているのに敬いの念が生じないのはエイラにとって不思議だった。

「貴方が契約を破ろうとするから、叩き起こされたんです。迷惑なので戻って頂きます」  
ガフは腰に手を当てて頬を膨らませる。

「い、意味が解りません。何であれ嫌です。私、還りたいので！」

フェディットが眉を顰める。先程からあった違和感の正体に気が付いた。

「仲間たちも皆私になつてしまった。ならもうこの地に未練はないです。故郷に還りたい。…  
還りたい」

その台詞は、エイラのものではない筈だ。

「エイラくんは…ご両親に会いたいと言っていたらう」

「……それはもう、いいんです。昨日会いました」

「昨日？」

セルビアが目を見開く。そんな訳がない。ここはターミナルからも離れている。エイラはどう見てもひとりで、移動手段も徒歩の筈だ。

「……………」

エイラは答えず、徐々にその身体は靄に包まれ始めた。

「エイラ？」

セルビアの呼び掛けにも反応せず、ガフを睨み付けたまま空に溶けて延びていく。フェディツトは言葉も無くその様を見ていた。

「エイラ、待つて！」

セルビアの手が、虚しく空を切る。エイラは霧散した。

それを大人しく見守っていたガフは伸びを言う。

「まあ、逃がしませんけどね」

セルビアの持つ小瓶を指差して微笑んだ。

「それと同じです。この辺りは今閉じた空間と化していますので、貴方たちも気を付けて下さいね」

アイーアツブスの力の破片は本来物理的干涉を受けない。それを閉じ込めておけているのは瓶の内側にガフがある種の結界を張っているからだ。その結界が今、瓶の外側：彼らが立つこの空間にも張られている。そしてその結界からはアイーアツブスのみならずガフを含む全ての者



が出られない。

やがて散った筈の紫霧は集束し、再びエイラの形になった。

「二度も逃がす訳ないでしょう」

特別大きな予備動作もなく、ガフはそう言いながらエイラ目掛けて槍を放った。驚いたのはフェディットとセルビアだ。セルビアは慌ててエイラに向かって駆け出した。が、投槍のスピードに敵う筈もない。

「エイラ!!」

エイラは腕を顔の前で交差させ、迫り来る槍から顔を背けて目を瞑る。動きに合わせて紫の靄が槍を弾いた。

「そういえば依代憑きの貴方と戦うのは初めてですね。折角なので楽しめると良いのですが」まるで舌舐めずりでもしているかの様だ。

いつの間にか、弾かれた筈の槍は再びガフの手中に在る。そもそもその槍は何処から取り出したのか。

ワクワクしていると言っても過言ではないガフに対して、エイラは完全に怯えている。セルビアはエイラを背に庇いガフに立ち向かう。

「ご心配なく。心臓と頭は狙いません」

「武力行使がそもそものだよ、こういうのは話し合いで双方ちゃんと納得してかなきゃ。無

理矢理言うこと聞かせたツケが今来てるんでしょ」

ムツとするガフの肩をフェディットがポンポンと叩く。

「まずは話し合おう。ね？」

「…話…は、随分してなかったか？」

楽しみに水を差され、ガフは詰まらなそうに武装を解いた。

セルビアの背後でエイラはホッと肩の力を少し抜いたものの、近くに立つセルビアにしか聞き取れない程の音量で呟いた。

「……応じる気はありませんけど」

「エイラ」

多分、私は私<sup>エイラ</sup>じゃなくなつた。

歴代依代とアイーアツブスの記憶があり、アイーアツブスの力が使える。聖霊への敬愛と畏怖が、恐怖に変わった。信心深い者が代理契約者<sup>ヨリシロ</sup>に選ばれるなら、この時点でヒビが入ってしまったのだろう。

それでも私<sup>エイラ</sup>には「両親に会いたい」という望みがあつたから、先ずはそれを叶えることにした。身体を溶かして再構築すれば、目の前には驚愕に目を開く両親が居た。見回せば此処は懐かしの我が家だ。

「お父さ」

「悪魔め！ 近寄るな！」

一歩踏み出そうとした足が止まる。

「あの角……！ 貴方、早く通報を！」

「あ、ああ」

「お母様……私、」

悪魔だったけど、司教さまが認めて下さつたの。国に必要なだと言つて下さつたの。そんな説明も口に出来ないまま。

「は、母ですって？やめて！私にこどもなんていないわ！」

「通報はした、そんなものの言葉を聞いてはいけない！こっちへ！」

父は母を連れて祈堂へ逃げて行つた。追う気にもなれず、自室へ向かう。そこに、私の痕跡はなかった。アルバムデータからも、一切の私の記録が消されていた。

「……」

「お帰りなさい、エイラさん」

そう声を掛けてくれるのはもう一人しかないのだ。

「……司教さま」

「不穏な別れ方をしたので心配していました。入国のデータがありませんが、どのように此処まで？」

私は無言で靄を纏って見せた。司教さまは細い目を少しだけ大きくして「そうですか」と一言洩らした。

「これもまた、前例がありません。センターへ戻りましょう。そこで現状と今後についてお話ししましょう」

大きなモニターが大量に並ぶ管制室を抜けて更に奥へ。薄暗い小さな部屋には幾つかの枢が並べられ、百合の生花で飾られていた。

「歴代の代理契約者たちです」

柩の数は、記憶より一つ少ない。前任者の遺体はまだ台に寝かされていた。真っ黒なヒトガタの作り物のようなソレの頭部脇に、朽ちた角が落ちている。

「どうして、私を此処に？」

「彼女らの遺体には、信仰心が残っています。貴女は異例ですから、彼女らの力を借りて少しだけアイーアツブスの力を封じさせて貰います」

ひとつひとつ、柩に目を遣る。

「不安に思う必要はありません。不自由な生活をお約束しますよ」

ひとつひとつ、記憶が蘇る。

「司教さまは、この人たちは幸せだったと思いますか？」

「勿論。聖霊の代理に選ばれ、国の安寧の為に存在できたのです。これ以上の幸せがあるでしょうか」

私の幸せは……両親に愛されて、朗かに暮らしていたあの時だったと今なら思う。それを無かったことにされたのは。アイーアツブスを初め、此処に眠る少女たちのそれまでの幸せが奪われたのは。

「柩の中身が信仰心というのは、言い得ているかも知れません。この人たちは、それを持ってはいけなかった」

此処に眠るのは、全て私だ。だからハッキリと思うことがある。

「此処で飼い殺されるのは、二度と、ごめんです」

八百年分の記憶が口を揃えて言う。

私は、幸せではなかった！

エイラがそれを口にした瞬間。

センター管制塔は、全ての機能を狂わせた。あちこちで機械が誤作動を起こし、警報が鳴り渡る。スプリングラーは水を撒き散らし、防衛システムは無差別に火を吹いた。

「なんということを……！」

司教が意識をエイラに戻そうとした時には、既にその姿は消えていた。

その瞬間、守護獣の契約が切れたとなんとなく解った。迷わず今度は私の故郷アイーアツプスに向かうことにした。取り敢えずはマルクトへ。そこから先は解らない。一体私は何処から、どうやってこの地へやって来たのか。宛もなく彷徨している内に、嫌な気配を感じた。

ああ、あの女だ。

恐い。折角自由になったのに。あの女に見付かったらまた元に戻される。嫌だ。嫌だ。  
一度は逃げられた。だけど、竜車が。見覚えのある、なんだかとても懐かしくさえ思えるその  
竜車が、私の足を止めてしまった。

話し合いを、とは言ったものの。互いに主張は変わらない。再契約を迫るガフ。断固拒否のアイーアイツプス。譲歩すべき箇所も見付からない現状だ。

「ガフは、再契約して欲しいんだよね？」

「そうですね」

「それだけ？」

「ソレが契約に応じれば私はお役御免です」

セルビアはひとつ頷いて今度はエイラに向き直る。

「エイラは、還りたいっていうけど…還る場所が解らないんだよね？」

エイラは無言で肯く。

どうしたものかと沈黙の落ちる中。ガフはその要求を初めて認識したと言わんばかりに、ひとつ提案を投げ掛けた。

「異邦の種。なるほど。では『樹』に訊いてみると良いのではないですか」

「……世界樹、セフィロート」

エイラは即座に察し、目を開いた。忌々しげに顔を歪め、震えるほど拳を握り締める。その動揺にセルビアは首を傾げた。世界樹のことは勿論知っている。この世界を支えると言われて



いる大樹。暦の源。なるほどそれはこの世の全てを知っていてもおかしくなさそうだ。とはいえ。

「世界樹に訊くって……答えてくれるの？」

ガフは頭<sup>かぶり</sup>を振り、にっこりと笑みを返した。

「意思ある知性体ですが、樹ですからね。どうすれば良いかは、アイーアツプスには解っているようですが」

解っている。解っている。それが本当なら、そう、あの樹が同郷なのであれば、その記憶を辿る価値はある。ただその方法は：

エイラが続けられないその思考の先をガフは迷い無く口にする。

「契約を交わせれば良いのです。貴女なら、その契約を辿って読み解けるでしょう」

ああそれをもっと先に気付けていたならば！

今回契約を逃れられたのはこれ以上ない、とんでもない奇跡だ。二度はない。全ての同胞<sup>アイーアツプス</sup>は使い果たしてしまった。

「ひとりでは、他者に頼ることを思い付けない。それは玄獣<sup>あなた</sup>たちの：強さ故の欠点ですね」それは哀れむようにも嘲るようにも聞こえた。

例え還るべき場所を知っても。還る手段を得たとしても。契約に縛られていては叶わない。

「守護獣は、国から出られないのかい？」

「出られないということはないが、契約者から離れ過ぎると弱る。それに他国の守護獣は領域侵犯を酷く嫌がるから、結果それぞれの国域から自主的に出ることはない」

「なるほど」

苛々すると言っていたオルデモイデを思い出した。

「あれ？そう言えば：エイラって、どうなってるの？」

契約が切れたのなら、エイラとアイーアツブスは何故離れていないのか。今更ながらに気付いたセルビアにエイラはキョトンとした様子で答えた。

「アイーアツブスは私です」

「え？エイラは？」

「エイラも私です」

「??」

つまり、とフェディットが割って入る。

「エイラくんはアイーアツブスと融合して、玄獣になった。新たに契約を交わすなら、新しくエイラくんと契約を交わす相手が必要だ」と、いうことかな？」

振られたガフは少し考えながらゆっくりと言葉にする。

「それが微妙なところで私にも解りかねるんだが：ひょっとしたら、エイラさんとアイーアツブスの契約は新規に有効かも知れない」

それは凡そ「代理契約者を必要としない」ことと等しい。これが通れば、守護獣が国に留まらなくてはならない理由を一つ潰せる。何せ契約者の更新が不要になるのだ。今までのような百五十―二百年おきの寿命はもう来ない。

「通るかどうかは多少賭けですが」

守るべき人間ヨリシロも無いのだから、センターで極秘に閉じ込めておく必要もなくなる。逆に『外』に居てくれた方が安心できるくらいだろう。新生したアイーアツプスには現状危険なものはない筈だ。

「ひとつ、国の呼び掛けには必ず応えることを条件に。貴女に行動の自由を与えましょう。どうですか」

嫌なら叩きのめして連れ帰って閉じ込めます、と溜め息混じりに吐き捨ててガフはエイラの返答を待つ。

条件は悪くない筈だ。ここらが折れ時だろう。この女は憎いが、故郷を知りたい思いは強い。

「……あの、私」

再契約に応じるにあたって、伝えておかなければならないことが一つ。

「センター、壊してきちゃいました」

センター上層階は修繕中の幕が覆い、エンジニアたちは必死にプログラムを修繕し、ガフとエイラは憤怒の司教に事のあらましを説明する——そんな地獄のような時を経て、センターは：イエソドは新体制への準備を整えていく。

エイラは再契約を了承し、賭けに勝った。自由を得たエイラは世界樹の記録を辿ったようで、「海に向こうへ行ってみようと思います」とフェディットに手紙を寄越した。

セルビアは竜を連れてマルジュへ戻った後、暫くしてエイラの元へ向かった。どうやら彼はエイラと共に生きるため、竜としての生を選んだようだ。砂の赤龍によく似た色の、立派な翼竜の姿だった。エイラに「どうして」と訊かれたセルビアの返答は「だって、ずっとひとりじゃ寂しいでしょ。竜は長生きなんだよ」だった。いや、続いた言葉があるが：それはこのふたりの秘密にしておこう。

ガフはウォートバランサー内が落ち着いた頃、静かに姿を消した。役目を終えて情報の海に還ったのだろう。

そして数年後。

フェディットは今塔に居る。意味は異なるが此処でも「先生」と呼ばれている。魔術師ではないが、学生たちに医療の知識と技術を教えながら病理の研究を続けていた。医師会からの心象

を悪くした所為でケセドではやりにくくなってしまった故だ。あの時の魔術師に相談したら「それは大変だね」と塔に掛け合ってくれて今に至る。必要に応じて魔術のことも知識としては少しずつ学んでいるが、自分には扱えそうにもないと感じている。

竜の羽ばたきが聞こえ、フェディットは窓の向こうへ目を遣った。

「先生！」

目の前に紫煙が立ち込め、みるみる人の形に変化したかと思えば、明るく軽やかな声が降る。

「お久しぶりです」

「いらっしやい。どうだい、世界は」

「楽しいです！聞いてください、この前見たのは——」

エイラがアイーアツプスの目的を達したのかどうかは解らない。だが、最近是世界中を回っているのだそうだ。領域侵犯に関しては、「怒られそうになったら逃げてます！」と言っていた。楽しそうに語るエイラの後ろから、竜が舞い降りる。その姿はなだらかに人間の形に変わる。

「エイラったら酷いんだよ、その時僕のこと置いてさ——」

「あつ、あれはセルビアさんが——」

わいわいと騒ぐふたりを微笑ましく見ながら、フェディットは三人分のお茶を用意する。生活は以前とは随分変わってしまったが。それでも今が平和に在ることは間違いない。

手の施しようのない神秘を認め、その緩慢緩徐な滅びを見守る。今となつてはそれもよしとする自分も居る。

目の前で世界の様子をキラキラと話すエイラも変わったが、フェディットもまた少なからず、旅を通じて変わったのだろう。

姿以外は相も変わらないセルビアは、今日も朗らかに笑っていた。

「ねえエイラ。今、幸せ？」

「なんですか急に！……まあ、悪くはないかな、と……思います」



## 27 エイラちゃんの片角の魔王講座

その体は粒子であり、液体を好み、電磁に干渉する。幻を見せ、毒となり、熱を奪う。風水土火光電磁時水闇…全ての精霊を従える異邦の玄獣。それと契約を交わした故の『基盤の国』だ。

「更に言えば群体だったんですね。もう一つになっちゃいましたけど」

「だから『王』だったんだね」

幻術学研究室で、幻術学講師と司書相手にエイラはアイーアツプスの講義をしていた。

「君、その角に関してはどうなんだい」

「あー、これは」

エイラはパン！と手を叩く。すると、エイラの角は左右対称に生えていた。続いて眼帯を外せば、硬化も損傷もない綺麗な顔が現れる。

「後天的にアイーアツプスを取り入れると、寄生部位である脳の一部が一度破損して再生されます。アイーアツプスが再生した痕つてこの角みたいな質感になってしまうので…。でも胎内に居る頃から寄生されていると、破損は起こらずに角二つで生まれてくるんです」

再び眼帯を着け手を叩くと、右側の角は消えていた。



「ふふ、これは前に貴方が見せてくれた幻術を真似てみました」

悪戯に笑って見せるエイラに幻術学講師は素直に感心する。

「凄いね！もつと色々、ちゃんと教えたくなっちゃうなあ」

「止めはしないが、相手は玄獣憑きだぞ。簡単に超されてしまいそうだ」

「そしたら逆に教えて貰うよ」

それはエイラの方から辞退する。幻術学講師は残念がったが、あっさりと引き下がった。

「そう言えば、精霊が見えるんだっけ？」

「あ、はい。精霊が、と言うより…『力』が視覚で認識出来るようにで」

「なんだと？」

司書が厳しい目を向ける。好奇心が昂っているだけで敵意はない。

「煌力に関しては、とにかく眩しいですね。正に名の通り、でしょうか。お陰で、静天になら

ないと煌力以外の力はいぶ見難いです」

「ああなるほど。それで『静天時には』と付くのか」

憑かれていただけの時なら見難い処か見えなかっただろう。

「ずっと眩しいのはごめんだけど、精霊が見えるのは少し羨ましく思っていたんだよ」

「魔術は精霊を操る術だからな」

「そうなんですか。この塔には…それはたくさん、居ますね」

今は左目に限らず見えてしまっているのもう見慣れてはいるが、塔とアッシャー山脈にはちゃんと見てしまうと歩けなくなるほど大量に精霊が居る。

「処で…こんなに長居して、コクマの守護獣は怒りませんか？そろそろお暇いとました方が良くかと…」

「大丈夫だと思っけどねえ」

「君は会ったことがあるんだったか。私は性格も知らんから何も言えんが、確かに長く引き留めた」

ケセドケセドの守護獣シエレスキアとホドホルデモイデの守護獣にはいつも大目に見て貰っているのだが、コクマの守護獣には会ったことがない。ちよくちよく邪魔しているが、他の国の守護獣のように向こうから会いに来てはくれないようで、まだ挨拶もしたことがないのだ。

「ダアトを介した方が会いやすいのでは？」

司書の提案に曖昧に返す。アイーアツプスは起源が違うので、ダアトにはあまり馴染まない。  
セフイロート  
世界樹の奴が異常なのだ。

「まあまた話を聞かせてくれ」

「うんうん、旅の話とかもね！」

「はい！それではまた！」

一礼して、エイラは霧散した。

「終わったー？」

「お待たせしました！」

エイラの形で赤竜の背に乗る。

「次は何処行こっか」

「そうですね、あ！ 久し振りに辛いものが食べたいです！」

紫煙と赤竜は終わらない旅をする。

終わらない世界を見て回る。

世界の果てまで。

# WORLD-MAP



- ① ウォートバランサー・・・・・・・・エイラの住んでいた国
- ② グナード・・・・・・・・初めての異国
- ③ マルジュ・・・・・・・・入院していた病院のある国
- ④ ガナック・・・・・・・・カレーを食べた国
- ⑤ サルツィエル・・・・・・・・蚊が出た国
- ⑥ リディウム・・・・・・・・香草をたくさん使う国
- ⑦ 大湿地帯・・・・・・・・蟹が居た所
- ⑧ ワーナー／塔・・・・・・・・魔術師の住処のある国
- ⑨ ゼクトゥズ・・・・・・・・イエソドと仲が悪い国
- ⑩ アッシャー山脈・・・・・・・・うさぎが出た山
- ⑪ 大橋・・・・・・・・集落が多くあるらしい場所
- ⑫ マルクトターミナル／世界樹・異界と繋がる場所

## 28 片角の守護獣と海の話

イエソドの守護獣の給与は、お小遣い制である。

「ありがとう先生」

司教から旅費を徴収してきたエイラは、マルクトの端から北東の方角へ祈りを送った。

再契約に際して「お金も貰えるようにしといた方が良い」と口添えしてくれたのは先生だった。お陰で金銭的に難の無い旅が出来ている。あまりねだりすぎると司教のお小言が長引くが、要求頻度と一度に貰う限度額も最初に凡そ決めてあるのでその範囲内であれば文句も言われない。

「海は広いなあ」

最初ノープランで越えようとし、挫折した海を眺める。

竜の翼をもってしても大海は越えられそうになかった。ひたすらに広大な海は飛行では越えられない。一度戻って、文献を漁った。驚くほど「航海」に関する資料が少ない。あるにはあるが、南北の移動ばかりで東西へのアプローチの記録がないのだ。海に向こうに誰も興味が湧かなかったのだろうか。それはかなり不自然に感じた。

「航海の鬼神なら知ってるかな？」

遠い目で海を眺めるエイラに赤竜がそう声を掛ける。

「どうすれば会えるでしょうか」

「うーん……造船と言えばネツァクだから、そっちの方へ行ってみようか」  
幸い、エイラは女の子だ。

肩に小型の竜を乗せ、眼帯の少女はランパスの街を歩く。今迄人との関わりは全てセルビアに任せていたエイラに、道行く人に声を掛ける等という行為は難しい。観光案内所のような場所はないかと期待して大きな街にやってきた。

アイーアツプスの知識も結局マルクトとイエソドに片寄っている。しかも大分古い情報だ。他国で得る驚きは以前のエイラと大差ない。

極々小さな声で肩の竜に話し掛ける。

「ネツァク域では男性が奴隷のようだ、と聞いてましたけど……意外と普通……いえ、寧ろ大切にされているような？」

「人権がないんだよ。ペットと一緒に。可愛がるだろ？」

労働用の牛や馬だって、鞭打たれるばかりではない。家族として大切にされる。しかし、働けなくなつて捨てられることもあるし、持ち主がどう扱っても罪には問われない。

「ウォートバランスーの女性より扱い悪いじゃないですか」

「え。比較されるレベルなの？」

「ギリギリ人権はあるとされてます」

ふ、とエイラは視線を上げた。

「う…わ眩し」

「キミなあに？ んー？ いや、キミたち、何？」

突然現れたまるで煌月のような眩しさの浮遊体。眩し過ぎてエイラには直視出来ない。

「ええと、そちらこそ何ですか！ 眩しいんですけど」

「眩しい??」

「エイラ。たぶん、これ神さまだ」

「神!? スサボですか？」

セルビアから見れば、そこに浮いているのはこどもの姿をした鬼神。スサボかと問われ少しむつとしている様子だ。

「スサボに会いたいのか？ 珍しいね。まだいたかなあ」

「あのっ私エイラ…あるいはアイーアツプスと申しまして。スサボに会いたいのですが取り次ぎ願えたりしますでしょうか」

鬼神は面食らった様子ながら、自己紹介に応じた。

「アイーアツプス…って、なんでこんなところに。でも納得。まあいいか。ボクはスクラグス。スサボに会いたいなら…うーん。分神殿はあるけれど…」

暫し考え、鬼神はくるっと一回宙返りをした。

「一応、明日の夕方分神殿にお客様が来るよと伝えてはおくけど、確実に会えるかはわからないよ」

「あ、ありがとうございます！」

目は覆ったままだが、神に向けて頭を下げる。

鬼神が眩しいだろうことは予測していた。神の加護を受けた人間は皆眩しい。外の人間が眩しく見えたのはその所為だ。きつとあの魔術師も某かの神の加護を受けていたんだろう。その大元。鬼神が眩しくない筈がないとは思っていたが、まさかこれ程とは。

「で、キミはアイーアツブス。ならそっちの彼は？」

「ボクはセルビア。しがない竜だよ」

スクラグス  
火の神はアハハと笑った。

「キミたちはふたりとも軸は人間だろ！変なの。面白いね」

「神様にはお見通しなのかな」

「だって、玄獣は普通簡単には名乗らないんだよ」

そういえばオルデモイデもアイーアツブスも自分で名乗ってはいなかった。そういうものかも知れない。



ウインルーパスの海沿いの町にある、白い柱が数本屋根を支えているだけの四阿あずまやの様な場所。此処がスサボの分神殿らしい。近付けば、誰かが寝ているのがわかった。

「あの…」

側まで寄つても起きる気配がない。色素の薄い長髪がベンチと彼を覆っている。

彼がスサボだろうか。確かに眩しいが、加護を受けた人間くらいの眩しさだ。なんなら側に居る猫の方が眩しい。

「えっ、猫あなたか？」

眠る彼の傍で丸くなっていた猫は、延びをしながら立ち上がった。眩しさと詳細は判らないが、確かに猫の形と動きをしている。セルビアから見れば、大きめの三毛猫である。

「あんたらが客か？航海中じゃなくて良かったな。何の用？」

尻尾をテシテシとベンチに叩きつけながら、まんまるの眼をエイラに向ける。

「あ、はい。海の向こうの事を聞きたくて」

「海の向こう!? わはは、わっはっはっは」

猫は転げ回って大笑いした。

「おい、おい起きろメイ! やべーやつらが来たぞ!」

寝ている青年をベチベチと前足で叩きまくると、小さく身動きして彼は呻き声を上げた。

「うゝん…なあにスサボ。遊覧? 輸送?」

「ちげーちげー！聞いた事も無いバカが来た！ぎゃあつ」

上半身を起こして眼を擦るメイと呼ばれた青年は、目覚まし時計を止めるが如く猫を驚掴むとぎゅうと抱きしめた。

「ごめんねーうるさくて。なんだっけ。お客さんだよね？」

海の向こうに行ってみたい事。途中まで飛んでみたが難しそうだった事。航海に関する資料が少ない事。そもそも、海の向こうの情報がこの世に残されていない事。

そんな話をひとしきりして、最後には笑い過ぎの航海の神は過呼吸で死にそうになっていた。鬼神だし、実際にはそんな事はない筈だが。

「はー笑った笑った。あー、大爆笑させてくれた礼に誠実に答えるが」

猫は出てもない涙を拭う仕種の後、真面目な声色で言った。

「無理だ」

「え…」

「実際、むかーしむかしに海の向こう、世界の裏まで行つた奴はいる。方法は船だ。でもな、奴は力ある王だった。金も人も時間も知識も技術も膨大に要る。現実的に、おまえには無理だ」

それに、と猫はじつとエイラの眼を見つめた。

「そこまでしても、巧くいつても大陸の反対端に着くだけさ。おまえさんが行きたい場所にはよっぽどの幸運が無きゃ行き着かない。虚海<sup>クリフォート</sup>への行き方なんざオレだって知らねーさ」

「クリフォート……」

その言葉は、すっと落ちた。

「そっか。ごめんね。お役に立てないみたいで」

「人と金が集まったら、単なる東西横断航海くらいなら付き合っ<sup>て</sup>やるぜ？」

「アイーアツブス、とんでもないところから来たんだねえ」

赤い翼を羽ばたかせて、セルビアは背に乗るエイラに声を掛ける。

「……でも、またひとつ収穫です」

「そうだね。前向きに行こう」

この旅に終わりはないのだから。

END

『片角』

著／加名山 炯斗

@mothkate

2019.12.20 ~ 2022.10.19

2026.5

